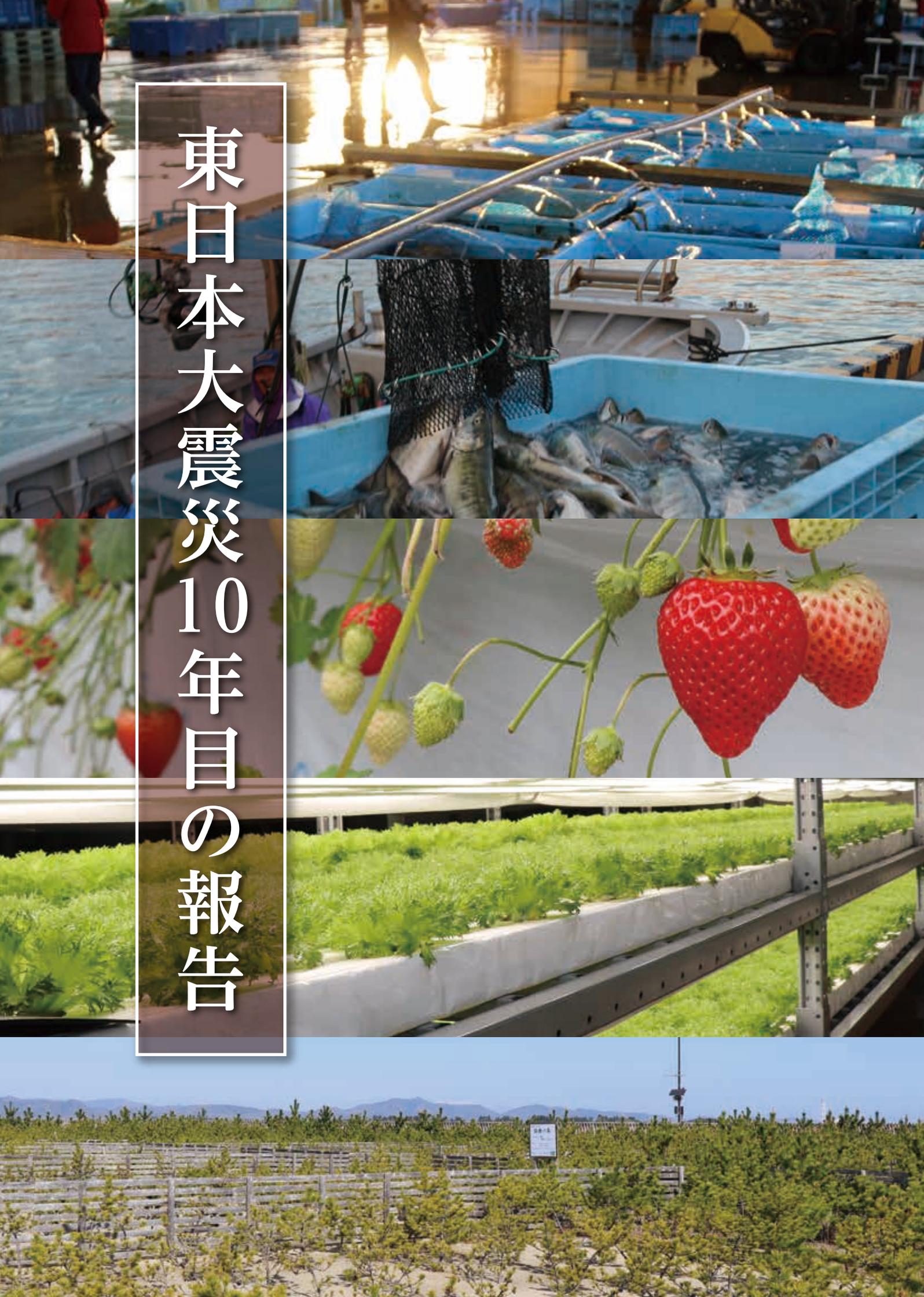
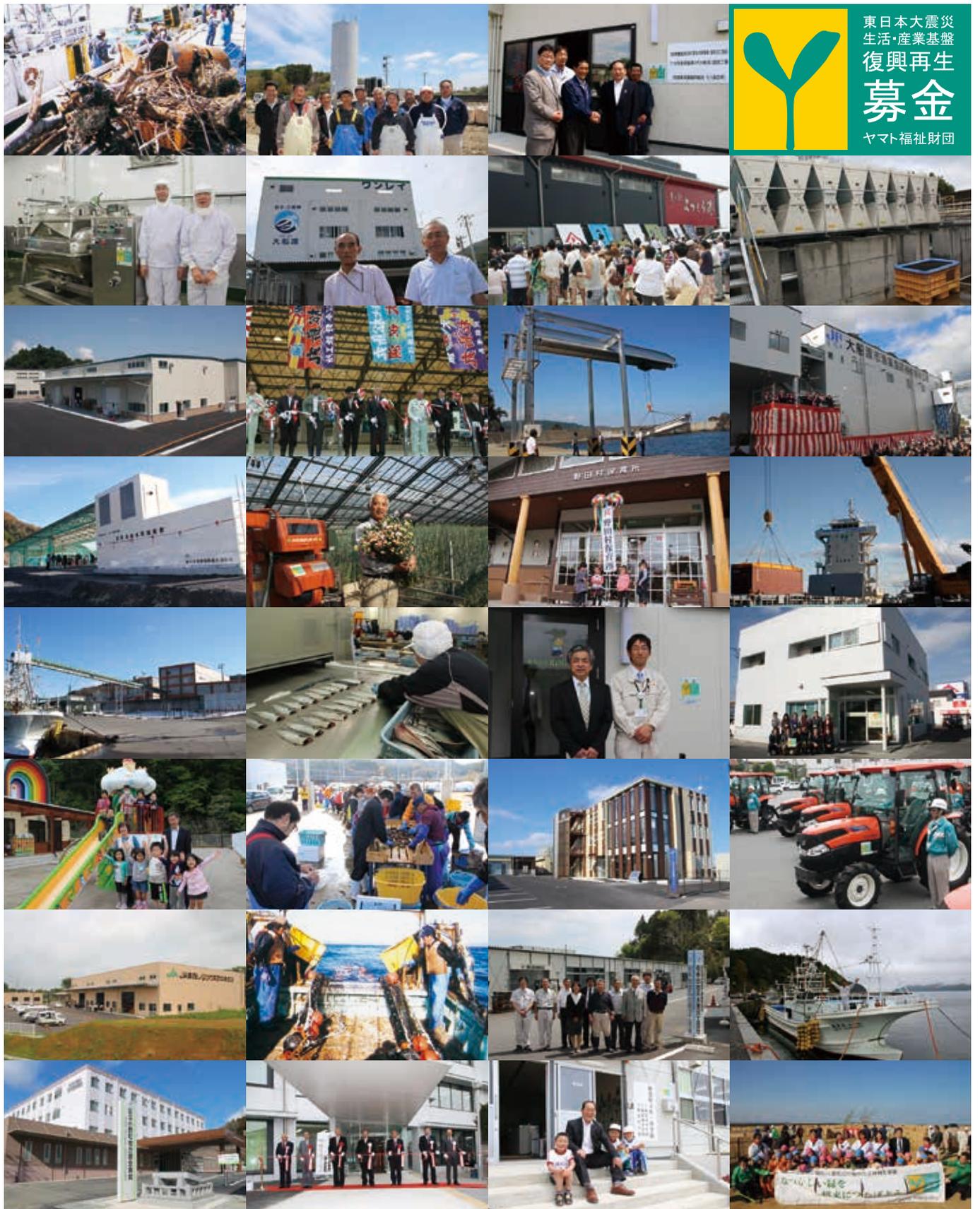


東日本大震災10年目の報告





**東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金
助成事業 全31件**



公益財団法人ヤマト福祉財団
理事長

山内 雅喜

はじめに

あの日から11年という月日が流れようとしています。
当時は長く遠い道のりになると感じていた復興への歩みも、被災地のみなさまのさまざ
まなご努力・ご奮闘により一歩一歩力強く前に進み、新たな街並みが生まれ、地域産業
も活気を取り戻し、平穏な日常生活の風景が広がっています。しかし、その道のりは決し
て平坦なものでなく、一言では語れないご苦労があったことでしょう。

「宅急便ひとつに、希望をひとつ入れて」

ヤマトグループは宅急便を育てていただいた地域のみなさまになんとか恩返しをしたい
という気持ちから「宅急便1個につき10円の寄付」を決意しました。そしてそれを受け、ヤ
マト福祉財団は助成の実行母体となるべく公益財団法人に衣替えをして「指定寄附金」
の指定を受け「東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金」を呼びかけたのです。寄付
総額はヤマトグループを中心に個人の方も含めて総額14.3億円に達し、「見える支援・
速い支援・効果の高い支援」という考えのもと、31件の助成を直接させていただきました。

10年という節目にあたり、これらの助成が当時どのような思いで、どのように活用さ
れ、その後どんな変遷を経て今日の姿にどのようなつながっているか……。当時の関係者
のお話しをお伺いし、現地を訪れ、今の様子を教えていただくことで改めて確認させてい
ただくことにしました。

それはみなさまの地元への熱い思いと、再生にご尽力された歴史を記録としてしっかり
残し、心に刻んでおきたいという思いからです。

これから当時を知らない世代の方々も増えていくと思いますが、私たちはあの出来事か
ら学んだ教訓を風化させることなく次の世代にしっかりと伝えていかなければなりません。
それは明るい未来を築いていく大いなる力になると信じています。

この冊子が一助になることを祈念しております。

最後になりますが、本冊子のために取材にご協力いただいたみなさまに心より御礼申し
上げます。本来であればもっと早い時期に発行すべきところ、新型コロナウイルス感染拡大の影響
で取材等がままならず取りまどめに時間がかかり、発行の時期が遅くなりましたことを
お詫び申し上げます。



10年目の街並み

大船渡

水産加工会社が立ち並ぶ大船渡湾



鉄道から、バスに交通手段が変わった、大船渡線BRT（バス高速輸送システム）大船渡駅

鶉住居駅のそばに、複数の公共施設を配置した「うのすまい・トモス」

釜石 鶉住居



高田松原津波復興祈念公園に、希望の象徴の遺構として残された「奇跡の一本松」と「陸前高田ユースホステル」。後ろには高さ12.5メートルの堤防と向こうに広がる広田湾



少しずつ道路や建物ができてきた市街地。左の奥には巨大な浜田川水門が見える



正面の茶色い建物が市民文化会館、その手前にヤマト運輸陸前高田営業所が見える



高田松原津波復興公園には東日本大震災津波伝承館や道の駅高田松原が併設されている



松川浦に植樹した10年目の松



南三陸

「防災庁舎」を震災遺構として、その場所が南三陸町震災復興祈念公園となった。公園とかさ上げされた商業地をつなぐのが南三陸産の杉を使った「中橋」。橋を渡るとさんさん商店街がある

小学1年生だったあの日、この目で見たものは
まだ私の中で鮮明に生き続けている。
どうかこの町が大好きだったあの日のように
活気と人々の笑顔であふれる町に
なりますように。



震災復興記念公園と市街地をつなぐ建築家、熊研吾氏設計の「中橋」

賑わいを見せる「さんさん商店街」



震災復興祈念公園より志津川湾を望む





ヤマトホールディングス
特別顧問

木川 眞

寄稿 ヤマトだから出来た

東日本大震災発生から2週間半後の3月29日、私は被災地に入りました。そして、大船渡、陸前高田、気仙沼の惨状を目の当たりにして本当に言葉を失ったことを、今でも鮮明に思い出します。目の前に広がる光景は、私はまだヤマト入社前の富士銀行時代、大震災の10年前に起こった9・11ニューヨークテロ直後に現地を訪れた時の悲惨な光景をはるかに超える衝撃的なものでした。しかし意外だったのは、お会いする被災者の方々皆さん全てが、冷静に穏やかに対応して下さったこと。怒りの矛先が明確なテロ事件と違い地震・津波は自然災害であったからなのか、あるいは日本人の特性なのかもしれません。が、感情を抑えながら我慢されている姿が余りにも切なく、このような未曾有の大災害に遭われながらも健気に振舞われている被災地の皆さんに対して「一民間企業であるヤマトは何をすべきか、何ができるのか」と、自分自身に問いかけ続けていました。

震災直後から現地社員の皆さんが自主的に始めていた救援物資の輸送協力を追認する形で「救援物資輸送協力隊」の活動は既にスタートしていました。でも、そうした短期的な対応だけでは足りない。この地域を支えてきた産業である水産業と農業が壊滅的な被害を受けており、その早期復活に向けた支援こそがヤマトがやるべきことではないか。それは、クール宅急便を育ててくれたこの地域への恩返しになるだろうし、自らが被災者でありながら体を張って献身的に頑張ってくれている現地社員の気持ちに応える事にもなる。そのために、使途を被災地の産業と生活基盤の復興・復活のためのプロジェクトと明確にした上で、思い切った寄付をする。これが帰りの車の中で出した私の結論でした。

帰京後早速、当時のヤマトホールディングスの有富会長・瀬戸社長と協議をして、「宅急便1個につき10円の寄付を1年間」という施策を決めました。1個につき10円という一見小さな金額に見えますが、最終の総額は142億円を超え、当時のヤマトホールディングスの



年間純利益の約4割にあたる巨額の寄付となりました。これは、東日本大震災に対する一企業の寄付額としては突出したものでした。このような大胆な寄付の経営判断を下すには、経営陣が一枚岩にならなければなりません。ただ、協議に要した時間はほんの1〜2時間、3人の思いに齟齬はありませんでした。むしろ、寄付について早い段階から示唆をいただいていた有富会長からは、やるなら思い切つてやれと背中を押された感がありました。そして、翌4月1日のヤマトホールディングス社長就任挨拶の最後に、被災地支援のための巨額の寄付を実施する方針を幹部社員の方々に伝えましたが、話し終えると同時に自然発生的に拍手が湧きあがったのは驚き、涙が出るほどの感動を覚えました。この施策を社員が納得して受け入れてくれたという安堵感と同時に、小倉イズムがDNAとして浸透しているヤマトでなければ実現しなかったことを実感した瞬間でもあったからです。

実はその後、ヤマトの思い通りの寄付を実現する過程では、いくつかの難題を乗り越える必要がありました。最もハードルが高かったのが日本の税制でした。災害支援のために無税で寄付をするのであれば、日本赤十字や政府、自治体に寄付をするというのが一般的です。でもそれでは巨額の寄付金の使途の可視化や時間効率の面で問題があります。従つて自らの判断で配賦先を決めて寄付することになりましたが、このような形の巨額の寄付は税法上課税対象になってしまうのです。純利益の4割を寄付し、しかも多額の税金を払うのでは、株主の利益を損ない代表訴訟のリスクすらありました。そこで、ヤマト福祉財団の定款を変更し公益財団法人に衣替えした上で財団を通じた寄付とし、助成先は第三者委員会で決定することにしました。そして、日本赤十字と同じ指定寄附金として認定するという財務省の大英断により、一企業の巨額の寄付金を全額無税化するという前代未聞の成果を得ることが出来ました。そして、このヤマトモデルは、その後の民間企業による寄付における先駆的な取り組みとして、高い評価を得ました。ヤマトの高い志が通じたということですが、まさに『一念、岩をも通す』を実現した事例として語り継がれて欲しいものです。



助成総額 最終報告

事業件数累計 31件
助成金額累計 142億1,849万円

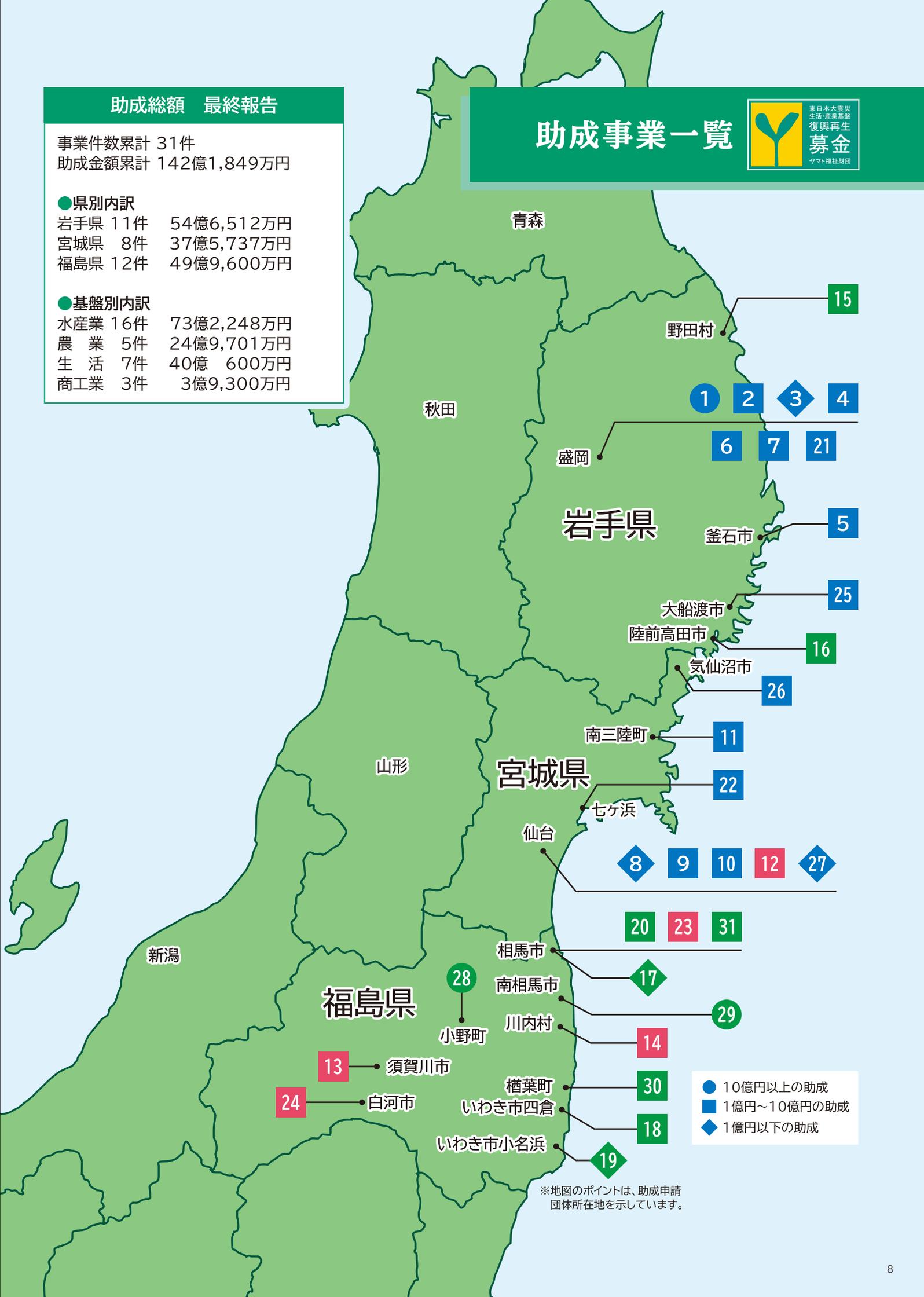
● 県別内訳

岩手県 11件 54億6,512万円
宮城県 8件 37億5,737万円
福島県 12件 49億9,600万円

● 基盤別内訳

水産業 16件 73億2,248万円
農業 5件 24億9,701万円
生活 7件 40億 600万円
商工業 3件 3億9,300万円

助成事業一覧



● 10億円以上の助成
■ 1億円～10億円の助成
◆ 1億円以下の助成

※地図のポイントは、助成申請団体所在地を示しています。

県別・事業別助成先一覧 (単位:百万円)

岩手県						
		事業名	水産	農業	生活・商工	県別合計
1	第1次	水産加工事業者生産回復支援事業	1,565			
2	第1次	魚価安定緊急対策事業	193			
3	第2・3・4次	水産業共同利用施設復旧支援事業	1,789			
4	第2・3次	製氷・貯氷施設回復支援事業	980			
5	第2次	釜石市魚市場経営基盤再生事業	185			
15	第2次	野田村保育所再建事業			319	
16	第3次	陸前高田市竹駒保育園の新設・再建事業			259	
25	第5次	「いわて三陸」夢あふれる漁業モデル創生プロジェクト	172			
県別・基盤別合計			4,887	0	578	5,465

宮城県						
		事業名	水産	農業	生活・商工	県別合計
8	第1次	海底清掃資材購入支援事業	99			
9	第1次	高鮮度水産物供給施設整備事業	600			
10	第1次	養殖用資機材等緊急整備事業	500			
11	第1次	南三陸町水産業基盤施設緊急復興事業	370			
12	第2次	農業生産復旧緊急対策事業		1,322		
22	第4次	七ヶ浜水産振興センター建設事業	590			
26	第5次	気仙沼仮設水産加工場施設設備整備事業	217			
27	第5次	海底清掃資材購入支援事業	58			
県別・基盤別合計			2,435	1,322	0	3,757

福島県						
		事業名	水産	農業	生活・商工	県別合計
13	第1次	JAすかがわ岩瀬農業生産再生事業		275		
14	第3次	川内高原農産物栽培工場建設事業		300		
17	第3次	相馬広域こころのケアセンター：なごみの新設事業			30	
18	第1次	よつくら港地域振興施設「交流館」復興事業			210	
19	第1次	「アクアマリンふくしま」熱源整備改修事業			80	
20	第2次	相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業			103	
23	第4次	農地復旧復興(純国産大豆)プロジェクト		300		
24	第4次	地域農業再生基幹施設緊急整備事業		300		
28	第5次	公立小野町地方総合病院整備事業			2,047	
29	第5次	鹿島厚生病院併設介護老人保健施設厚寿苑の新設事業			1,030	
30	第5次	楢葉町仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業			191	
31	第5次	福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業			130	
県別・基盤別合計			0	1,175	3,821	4,996

総計			7,322	2,497	4,399	14,218
----	--	--	-------	-------	-------	--------

目次

東日本大震災10年目の報告

2

はじめに

ヤマト福祉財団理事長 山内雅喜

10年目の街並み

3

6

寄稿

ヤマトだから出来た ヤマトホールディングス株式会社特別顧問 木川 眞

助成先一覧

8

助成先のいま — 水産業

11

1. 南三陸町水産業基盤施設緊急復興事業
2. 「いわて三陸」夢あふれる漁業モデル創成プロジェクト
3. 水産加工業者生産回復支援事業（（有）三陸とれたて市場、小野食品（株））
4. 釜石市魚市場経営基盤再生事業

助成先のいま — 農業

23

1. 川内高原農産物栽培工場建設事業
2. 農業生産復旧緊急対策事業（山元いちご農園（株）、イグナルファーム（株））

助成先のいま — 生活・商工業

31

1. よつくら港地域振興施設「交流館」復興事業
2. 陸前高田市竹駒保育園新設・再建事業
3. 福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業

40

他にもこんな助成先から10年目の報告が届きました

あのとき現場は、労働組合は

43

大船渡支店陸前高田センター（当時）／ヤマト運輸労働組合岩手支部／
気仙沼支店（当時）／石巻支店（当時）／ヤマト運輸労働組合宮城支部／
ヤマト運輸労働組合新宮城支部／双葉支店富岡センター（当時）／
ヤマト運輸労働組合福島支部

ヤマト福祉財団「東日本大震災
生活・産業基盤復興再生募金」
事業の概要

55

年表

56

編集を終えて

59

助成先のいま

水産業



水産業 (基盤別)

16件：総額 73億2,248万円

岩手県 9件：48億8,700万円

- 水産加工事業者生産回復支援事業 15億6,563万円
- 魚価安定緊急対策事業 1億9,376万円
- 水産業共同利用施設復旧支援事業 9,179万円
- 製氷・貯水施設回復支援事業 2億4,646万円
- 釜石市 魚市場経営基盤再生事業 1億8,555万円
- 「いわて三陸」夢あふれる
漁業モデル創生プロジェクト 1億7,200万円

宮城県 7件：24億3,500万円

- 海底清掃資材購入支援事業 9,985万円
- 高鮮度水産物供給施設整備事業 6億円
- 養殖用資機材等緊急整備事業 5億円
- 南三陸町 水産業基盤施設緊急復興事業 3億7,049万円
- 七ヶ浜水産振興センター建設事業 5億9,000万円
- 気仙沼 仮設水産加工場施設設備整備事業 2億1,700万円
- 海底清掃資材購入支援事業 5,800万円

南三陸町

水産業基盤施設

緊急復興事業

(宮城県)



シロザケの遡上に間に合わせるため、急いで建設した仮設魚市場

助成概要

- 魚市場、漁船、生産施設、加工施設の仮設を含めた早期復旧費用を助成する
- 申請団体：南三陸町
- 助成金：3億7,049万円

助成当時

シロザケの遡上までに仮設魚市場を

本助成の効果が初めて目に見える形となった南三陸町

民間企業だからこそできる「見える支援・速い支援・効果の高い支援」を目指し、動き出したヤマトグループの被災地への助成。その効果が、どこよりも早く着実に進み、目に見える形となったのが、南三陸町が申請した水産業基盤施設緊急復興事業で建設された仮設魚市場です。

南三陸町は、アワビの産地であり、シロザケの漁獲量では宮城県随一。カキやワカメの養殖でも有名で、海岸沿いには市場や作業場、加工場が立ち並んでいました。しかし、その大半が地震による津波で破壊され、多くの漁師や地元の人たちは、仕事を根こそぎ奪われてしまいました。この苦境から立ち直る機会が、大切にふ化放流したシロザケの水揚げです。しかし、シロザケが遡上をはじめるのは、9月下旬から。刻々とタイムリミットは迫っていました。

漁業組合と南三陸町は「一刻も早く水揚げできる体制を整えるには、仮設で魚市場を建設するしかない」と国に助成を働きかけます。ところが、仮設の市場や作業所では承認はされにくく、しかも1/3が自己負担になると説明を受けました。

当時、産業振興課水産業振興の係長 大齋彰浩さんは「このままでは苦勞し育て放流したシロザケとともに、水産業復興の機会も逃してしまふ。ヤマトさんが行っている民間の助成が最後の望みだと願いを込めて申請したので」と話します。

2011年10月21日、志津川漁港に仮設魚市場が完成し、24日には無事に初セリが行われました。

「威勢良く飛び交うセリのかげ声を聞いたとき、心の底から間に合っ て良かったと安堵しました」と大齋さん。2012年5月には、仮設ワカメ作業所が、9月には仮設牡蠣処理場(カキむき場)も完成します。

「漁師の命ともいえる漁船も、購入する目処が立つてきました」と話すのは、当時の宮城県漁業協同組合志津川支所 運営委員会の佐々木憲雄委員長。しかし、震災のダメージは大きく南三陸町のかつての活気を取り戻すには、まだ厳しい状況に。「それでも町の経済循環の流れも徐々に回復しつつあり、明るい兆しも見えてきたところです。これから町を担う人材を育成しながら、水産業だけではなく観光を含めた複合的な海業(うみぎょう)による復興を進めていきます」とお二人は話していました。



名物の一つ、ホヤも順調です



次々と水揚げされるシロザケ





仮設ワカメ作業所は、いまも現役で稼働（写真上）、春先に旬のワカメの収穫（下）



現在、仮設魚市場は町民の憩いの場、イベント会場として愛されています

そつごま

助成施設は、いまも現役で活躍中

一番大変なときに水産業を支えてくれたのが仮設魚市場

南三陸町を最初に訪れてから約10年が経ちました。水産業基盤施設緊急復興事業で助成した施設は、急ピッチで建てた仮設ばかりでしたが、いまも活用しているのでしょいか。

お話を伺ったのは南三陸町農林水産課水産振興係・係長の佐藤守謹さんと宮城県漁業協同組合 志津川支所支所長の阿部 富士夫さんです。佐藤さんは「仮設魚市場建設を助成いただけでいなければ、南三陸町の水産業はどうなっていたか。みんな心から感謝しています。5年ほど前にHACCPにも対応した公設の本市場ができ上がりましたので、仮設市場はその役割を終え、現在は町民の憩いの場・イベント広場として愛されています。仮設とはいえ、しっかりとした基礎工事を行った施設ですから、雨樋の補修をちよつと行つたぐらいで立派に活躍してくれていますよ」と話します。

10年の歳月が過ぎ、地球温暖化の影響もあり、水揚げされる魚種も大きく変化しています。

阿部さんは「一番変わったのは、助成のきっかけとなったシロザケで

す。震災直後に仮設魚市場を作ったときは、結構な水揚げ量があったのですが、いまは落ち込むばかり。あの当時とこの2年間では比較にならないくらい減ってしまいました。シロザケは我々にとって一番大きな収入源だったものから、深刻な痛手です。水産庁や県などに調べてもらつてはいますが、海水温の上昇が一因ではないかというくらいしかわかっていません。いまは、私たちが放流した稚魚が、どこまで北の方に行つているのかを追跡調査いただいています…」と溜息を漏らします。

また生活の糧の一つであったイサダも、1年ごとの水揚量の浮き沈みが激しく期待できなくなりました。それでもワカメなど水揚げが増加したのも。さらに、南三陸の新たな水揚げの柱も誕生しています。

「現在、私たちの生活を支えてくれているのは、銀ザケです。銀ザケは、市場販売価格の変動が大きな魚種なのですが、養殖の利点を生かし、ある程度安定した計画数量を見込むことができます。しかも今年度は、計画よりも順調に水揚げができた上に、販売価格も良好。昨年以上の売上げを達成しました。いまは銀ザケ養殖が、志津川支所の売上の



宮城県初の「優良衛生品質管理市場・漁港」認定を受けている、2016年に建設された本市場





待望の仮設牡蠣処理場が完成。満面の笑顔で作業に取り組む作業員

半分を占めるほどになっています」と力強く阿部さんが説明してくれました。

**牡蠣王国・南三陸町の新名物
「あまころ牡蠣」を「賞味あれ**

「牡蠣処理場も仮設として建設しましたが、いまでも現役で活躍してくれています。かなり年月が経ち、私たち同様にあちこちがかなり老朽化はしています（笑）。来年の9月ごろの牡蠣の殻剥きをはじめの前までに、痛んでいる部分を整備していこうと準備を進める話も出ていましたが、コロナの影響もあり、いまは慎重にならざるを得ないというのが実情です」と阿部さん。

それでも牡蠣の養殖の話になると阿部さんの目は、生き生きと輝いてきます。

以前、取材したとき「震災前は過密状態で養殖をしていたため、味も形も悪く、品質が低下していたが、養殖イカダの数を減らすことで、牡蠣王国・南三陸が誇る牡蠣養殖を再生できた」と伺ったことがありました。「そんな牡蠣養殖の取り組みが、2019年に農林水産祭の天皇杯を受賞したんです。日本の水産部門のナンバーワンとなる、そう簡単にはいただけない賞をいただき、地元の漁師たちは大喜びしています。私も41年間職員をしています。こんな荣誉あることは初めての経験です」と顔をほころばせます。

また震災後、南三陸の新名物と

して話題を集めているのが「あまころ牡蠣」です。宮城県北部で殻付カキを「ころ牡蠣」と呼びますが、その甘い味の特徴と合わせ「あまころ牡蠣」と命名されました。

一般的な牡蠣養殖は、出荷までに1〜2年ほどかかりますが「あまころ牡蠣」は養殖方法を改良することで、養殖期間を10カ月に短縮することに成功しています。養殖真牡蠣の産卵がはじまる8月ごろに樹脂製の採苗器を投入し、志津川湾の天然牡蠣を採苗。ある程度大きく成長したら採苗器から取り外し、養殖カゴの中に一つずつ入れて養殖することで、厚みのある形の良い牡蠣へと育てていきます。

満0歳の産卵を経験していない未産卵の牡蠣は、エグ味や渋味がなく、身入りはぶつくりとして甘みが凝縮。試食させていただきましたが、まさに「あまころ」の旨さでした。

**忘れてはいけない悲劇と
多くの人たちの協力のもとで**

南三陸町を最初に訪れてから10年が経ちますが、ずっと忘れられない光景があります。それは、津波で骨組みだけとなった南三陸町防災対策庁舎です。

「亡くなられた方たちへの追悼の思いと、震災の教訓を風化させないために、いまでも宮城県が管理・保存を続けています」。そう説明いただいた南三陸町の副町長 最知明広さんは、震災時、災害復興の先頭に



震災後の牡蠣養殖の取り組みで農林水産祭で天皇賞を受賞



南三陸新名物の「あまころ牡蠣」



2013年5月に完成した新牡蠣処理場

南三陸町地方卸売市場水揚データ

魚種	2010年度	2020年度
銀サケ	268.8	1,604.6
	110,700	844,878
サケ類	1,936.8	145.3
	796,394	132,010
ヒラメ	11.0	14.8
	12,354	14,073
アイナメ	8.3	9.3
	7,136	6,396
イサダ	962.9	395.7
	58,961	81,235
タコ	235.3	170.5
	88,975	111,384
その他	1,592.8	1,037.4
	352,158	181,875
合計	5,015.9	3,377.6
	1,426,678	1,371,851

※2020年2月末時点 ※上段水揚数量(t)、下段水揚金額(千円、税抜)

「いま志津川支所は、宮城県で一番大きな支所となつています。しかし、獲れる魚種は様変わりし、全体の水揚量は未だに震災前を超えるには至っていません。他所と同様に、後継者不足にも悩まされています。それでも、サケや牡蠣養殖に人生を賭けてきた父や祖父の意志を継いで、この町で漁師を続けようとする若者たちもいるんです。そんな次世代を担う者たちが、他の港町に堂々と自慢できる水産業に育て、バトンを渡してあげたいじゃないですか。幸い私たちには、宮城県がヤマトさんに助成を申請して設置できた高鮮度スラリーアイス施設もあり、いまも元気に稼働しています。牡蠣処理場やワカメ加工工場にも、まだまだ現役で頑張ってもらわないといけませんね」とお二人は、笑って話してくれました。

「あ のとき、一番苦労したのは、支援物資の取り扱いです。大量に届いた物資をどうきばいでいけば良いのか。ロジスティクスの素人の私たちにはなす術がなく、すぐにパニック状態になってしまいました。そこでヤマトさんにSOSを出して相談したんです。すると、私たちに任せてください」と力強い返答をいただき、見事に解決いただけました。本当に頼もしかったですよ」と当時を振り返ります。

「南三陸町は、津波で亡くなった方も含め、いまでも町の人口は震災前に比べて減少したままです。水産業を柱に一步步復興の道を歩んできましたが、復興には時間がかかるため、若い人たちの中には待ちきれずに町を出てしまい、そのまま帰ってこない人もいます。それでも多くの人たちの努力で、魅力ある町へと付加価値を高め、息を吹き返してきました。いまでは他所からここに越してくる方も増えているんですよ」と最知さんは説明してくれました。



何年経っても、震災の教訓を風化させてはいけないと保存・管理される「南三陸町防災対策庁舎」

宮城県漁業協同組合志津川支所共販取扱数量の推移

魚種	2010年度	2020年度
生ワカメ	139.1	273.8
干ワカメ	17.9	13.8
ボイルワカメ	449.2	241.1
牡蠣	537.0	497.1
銀サケ	1,235.2	2,167.3
ホヤ	501.5	126.4
ホタテ	696.7	676.1
ウニ	10.4	25.6
アワビ	12.5	9.7
その他	207.8	941.9
水揚合計	3,807.3	4,972.8

※2020年2月末時点 ※単位:t、魚種は一部抜粋

※1球状の水を海水や真水を混合して攪拌したもの。雪が半分溶けたような状態で、従来の水で不可能だった、鮮度保持が可能

宮城県が「高鮮度水産物供給施設整備事業」として申請したスラリーアイス施設は、本市場に移設し現役で稼働中



「いわて三陸」

夢あふれる

漁業モデル

創生プロジェクト

(岩手県)



荷捌き施設には、製氷力2,100kg/日、貯水量5tの海水氷生成プラントを助成で導入。施設横に見える漁業資材の積み込み用フォークリフトや運搬用軽トラックも購入したことで力仕事も軽減

助成概要

- 高付加価値の魚介を安定供給するため、調査船や漁具資材の購入と荷さばき施設などの設備導入の費用
- 申請団体：三陸漁業生産組合
- 助成金：1億7,200万円

助成当時

若い世代に夢を与える魅力ある漁業へ

絶望しかなかった荒れ地から
いま新しい物語がはじまる

岩手県大船渡市の越喜来(おきらい)地区は、イサダやカニ漁、ホタテの養殖などで活気にあふれる漁師町でしたが、震災により572隻の漁船のうち500隻を失います。

「県は、漁船の購入は補助しても、津波に流された漁具や機材は各自で購入してほしいと言う。でもそんな力は残っていない」。多くの漁師が、無惨に広がるガレキの前に途方に暮れていました。しかし「このままではダメだ」と数名の漁師が立ち上がります。熊谷善之さんは

そしていま

鍛え直された魚は海を越え世界へ

助成で届いた道具を見て
漁業を再開できる喜びを実感

越喜来地区はどう変わったのか。現在組合長を務める熊谷善之さんは、当時の状況を振り返ります。「あのころは毎朝『悪い夢を見ていたに違いない』と目を覚ますけど外はガレキの山で『ああ、現実なんだ』と思い知らされる毎日だった。

「ただ魚を獲るだけでは故郷の漁業は再生できない」と危惧。加工販売業を営む八木健一郎さんも「自ら製品化を行い販売することで若い人にも夢のある漁業にしよう」と呼びかけます。漁師たちは瀧澤英喜さんを組合長に三陸漁業生産組合を結成し、本助成に申請しました。

その声に応え調査船・漁具・養殖用具、高鮮度の水揚げを可能にする設備費を本助成で支援。2013年5月には、新しい冷凍荷捌き施設も完成しました。竣工式で瀧澤さんは「絶望しかなかったこの荒れ地から、新しい物語がいまはじまろうとしています」と語りかけました。

そんなとき、ヤマトさんから支援決定の電話をいただいたんだよ」。しかし助成金が出ると言われても、なかなかピンときませんでした。

「1億2000万円なんて途方もない金額は想像もつかなくて。でもカゴが1000個、網が何十反と届いて、やっと喜びを実感できた。みんな『道具さえあればなんとかなる』と体でわかっているからね」。



組合員の家族も総出で、届いたロープ束を切り出し、かご漁、刺し網漁、養殖などに使う漁具を製作、漁に臨む



組合の共有使用船舶「第十七天王丸」と三陸漁業生産組合のみなさん

膨大な数のロープ束も届き、早速、高台に借りた倉庫でイサダ漁、刺し網漁などに使用する漁具作りを開始します。タコやカニのカゴの数ももつと必要であり、全組合員が海に戻れるようにと、みんなで力を合わせて段取りを整えていきました。

「最初に届いた道具はチェーンソーです。いまも番屋で薪を切るのに使っていますが、そのときは、なんでこのタイミングでチェーンソー？と久しぶりにみんなが笑顔になりました」と弟の熊谷博之さん。他にもフォークリフトなどを購入し、いままで手作業で大変だったことが随分と楽になったと話します。

組合員は仕事への意欲から海や魚に対する意識まで変化

越喜来地区を訪れた春先は、イサダ漁の真つ盛り。夏には真鱈漁などがはじまりますが、他にも牡蠣やホタテの養殖も行っています。

「私は、カゴ漁などと一緒にホタテの養殖もやっている。必要な漁具、資材を助成いただき、生産が安定したことから、2人の子どもを大学に行かせることもできたんだ」と瀧澤さんはうれしそうに話します。

「今年のイサダは80kmくらい走らないと獲れないから毎日だと大変。みんな以前ならなにか理由をつくって休んでいたのに、いまは時化浜でも競って漁に出て行きます。一度どんだ底を見て、陸に上がったカッパの辛さ、厳しさを知り、自分たちは漁

師しかできないんだとわかってからは、意識が大きく変わったんです」と組合員の刈谷さん。

「獲らないのはクジラとサケくらいで他はなんでも獲ります。でも、むやみに乱獲することはありません。温暖化の影響もあり、寒流系の魚の生息域はどんどん北上し、以前に比べ魚種も漁獲量も変化していますからね」と熊谷博之さん。それをコントロールするため、熊谷組合長が組合共有漁船の第十七天王丸に乗り指示を出します。

「コックピットと呼んでくれ」とうれしそうに見せていただいた操舵室には、助成で装備した高精度な魚群探知機や3D表示の潮流計などが、いまも現役で活躍中です。

「これを駆使して定期的に海況情報や魚群を調べ、好ポイントを見し、組合員へ割り当て指示などを出している。船団を組む漁業において、出漁船全体の漁獲を安定させることはとても大切なんだ」と熊谷組合長。

さらに獲ったあとも、魚種ごとにどう処理すれば鮮度や旨味を高められるか、商品化・販売ルートなども含め、未来につながる新しい漁業を目指しています。「これは(有)三陸とれたて市場の八木さんの受け売りだけどねとみなさんは笑います。では、具体的にどんな工夫を凝らしているのか。次頁の「水産加工事業者生産回復支援事業」で、八木さんに詳しくお話を伺いました。

三陸漁業生産組合データ

当時(2011年4月現在)

保有船舶数 ……2隻
 漁業従事者 ……2経営体
 水揚げ高 ……600万円

現在(2021年4月現在)

保有船舶数 ……18隻
 漁業従事者 ……11経営体
 水揚げ高 ……2億7,200万円



第十七天王丸の「コックピット」。魚群探知機、潮流計、資源や海況調査のための機械が並ぶ操舵室



2013年1月に行われた進水式で、大漁旗を復興の願いに掲げる「第十八宝来丸」

水産加工事業者 生産回復支援事業 (岩手県)

助成概要

- 水産加工業者が必要とする機器類
購入および設置
費用などを助成
- 申請団体：岩手県
- 助成金：15億6,563万円

助成当時

107の水産加工会社が動き出す

漁業・養殖業・水産加工業が
一体となった復旧を目指して

来地区の「(有)三陸とれたて市場」です。

代表取締役の八木健一郎さんは、本助成で事業再建に海水濾過装置、真空包装機などの設備を購入。

一方、震災で大打撃を受けた水産加工会社も早急な支援を待ち望んでいました。岩手県は「漁業・加工業・販売業が一体となった復旧を」と考えますが、震災当時、民間企業への国からの助成は難しい状況。そこで岩手県が本助成に申請したのが「水産加工事業者生産回復支援事業」です。県は助成金約16億円を活用し、107の民間企業を支援。そのうちの一社が、越喜

「三陸で獲れる新鮮な魚介をより魅力的な商品として売り出すには、企業と漁師が力を合わせるしかない」と地元漁師たちと協同します。津波でインフラが壊滅したことを機に、理想的な産地機能を著名料理人と定義。漁業・加工を連続して整備する取り組みを行いました。

そしていま

市場を捉えた高付加価値の商品を (有)三陸とれたて市場

漁業の古いやり方から脱却
ワンチームで漁業を再生

八木さんは、前頁で紹介した「三陸漁業生産組合」の結成を呼びかけた一人でもあります。

「私は工場設備などをすべて失いましたが、水産加工事業者生産回復支援事業のおかげで会社再建の一步を踏み出すことができていました。でも原料供給者である漁師たちは、漁具もなにもかもなくしたま

まで絶望していたのです」。

生産加工会社と漁師が、ともに前を向いて歩まなければ、越喜来地区の水産業の復興はありません。八木さんは、自分たちで組合を立ち上げ本助成に申請すれば、より素早く動き出せると漁師たちに説明。そして「三陸の大切な宝である魚介の価値を高めるために、これからは獲り方、作り方、流通の方法も変えていくべきだ。新しい枝葉をいろんな角度で育てていかないと、



ガレキを取り除いたところに建てた「三陸とれたて市場」の看板(写真上)、まだ仮小屋のような工場内には、助成で購入した真空レトルト用の機械や最先端の冷蔵機器が輝いている



「三陸の魚介の美味しさをアピールする商品を開発し、世界に届けたい」と八木健一郎さん(写真左)、台北調理師協会と交流(写真右)



独自の処理を施すことで、とれたての旬の美味しさを家庭で味わえる「盛るだけお造り」天然旬凍シリーズ



生きたイサダをCASで冷凍し、精密凍結活餌料として水族館などへ



素材を活かし(水揚げ時に素早く神経×)・旨味を引き出し(丁寧に手作業で下処理)・極上の品質を保つ(最新凍結技法CAS)。これが三陸とれたて市場の新ブランド「天然旬凍」
令和3年度6次産業化事例 学生応援賞受賞(農林水産省)

潮目にあり、豊富で高品質な魚介が水揚げされる奇跡の海です。その

「三陸は、寒流と暖流がぶつかる潮目にあり、豊富で高品質な魚介が水揚げされる奇跡の海です。その

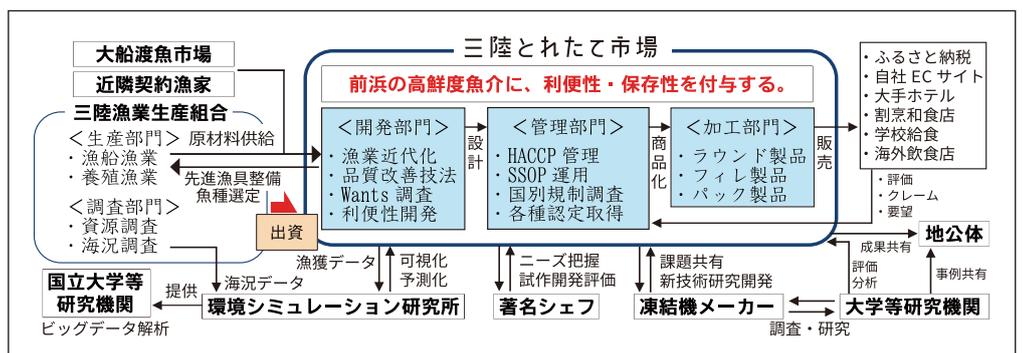
(有)三陸とれたて市場データ

当時(2012年度)

小売向受注件数 ……3,775件
小売向受注金額 ……2,666万円
輸出先国 ……なし

現在(2021年度)

小売向受注件数 ……7,411件
小売向受注金額 ……4,470万円
輸出先国 ……5カ国



小野食品株式会社工場再開式



震災から3カ月後に工場を再開。「離ればなれになった社員を早く呼び戻せる会社にとしようと、残った社員と誓いました」と小野社長（前列左から5番目）

自社ブランドの直販で再生「小野食品(株)」

ガレキの中からみんなで立ち上がった第2の創業

「近くにあった木材置き場の丸太が、工場の壁を突き破っていた」「最新の大形冷凍庫を買い、1年分・約3億円の材料を貯蔵していたのに全部泥まみれに」「大切な製品レシピがパソコンごと消えてしまった」。

多くの加工会社がかげがえのない財産を津波に飲み込まれましたが、県の申請した「水産加工事業者生産回復支援事業」を活用し、自らガレキを取り除きながら、事業再建に前進しはじめます。当時、小野食品(株)代表取締役の小野昭男さんは「風評被害で故郷を離れる会社もあります。この助成を活かして新たな自社ブランドを開発し、釜石市の復興のためにも頑張ります」と笑顔で語ってくれました。

2021年4月、再会した小野さんの笑顔は、当時とまったく変わっていません。「社員が撮っておいてくれたんですよ」と見せてくれたのは、震災からわずか3カ月で釜石にある工場を再稼働した時の写真。

「震災の2週間前、大槌町に中古とはいえ内装や設備機器に2億8000万円ほどかけて自社ブランド商品を開発する三つ目の新工場を造ったばかりだったので、全部津波にやられてしまつて。2階の事

務所に船が飛び込んでいる姿を見たときは、呆然としました。それでもみんなで泥をはき出しながら各工場を点検してみると、トンネルフリーザーやレトルト装置などの大きな機械は、オーバーホールすればまだ使えるとわかつたんです。そこで助成を使って蘇らせ、圧力容器なども購入し釜石の工場を再開しました。この写真を見ると、感謝の気持ちを噛み締めながら「第2の創業だ」と社員に呼びかけたことを思い出します」。

消費者が求める商品を開発し 今後は通販での直販を柱に

しかし、再出発は決して平坦な道ではありませんでした。「目の前の現実、自分が想像していたものとはまったく異なり、経営者としてどう判断していくか、新しい方向の決断を迫られたのです」。

小野食品(株)は、焼き魚や煮魚を工場調理し、商社や問屋を通じて全国のホテルや外食産業に卸す業務系事業が売上の約7割を占めていました。しかし、3カ月間生産がストップしている間に状況は一変。震災という特殊な事情といつても、商社や問屋は仕事を止めるわけにはいかないため、大半が他所に流れていきました。さらに立ち塞がったのが、放射能汚染による風評被害でした。



三陸釜石の水産物を調理し、自社ブランド「おのや」として通販で全国展開



再開した釜石工場には、助成で導入した加熱、調理、殺菌、冷却までできる圧力容器も(当時)



5年前に再建した大榎工場は、消費者向け商品の開発拠点に。(写真上・右) 釜石の本社・工場は、業務向けとして機能し、いまは震災前より多い131名の社員が働いています



「それでも私たちを信じて支えてくれたのが、地元の学校、高齢者施設や病院関係の方々。そして通販事業で獲得していた一般消費者のお客様だったのです」。

震災前から小野さんは「今後、商社や問屋頼みの業務系だけでは難しい」と考えていました。通販業者を通して販売も行っていましたが、メリットが大きいのは直販です。そこで和食の職人に出汁の取り方など基礎から学ぶとともに、お客様がなにを求めているかをアンケートで調べ、故郷の食材を活かした独自の商品を開発。販売会を開くと、その味と品質は高く評価され、頒布会会員のお客様は徐々に増えて5000人ほどに増えました。本格的にスタートさせようと、大榎町に新工場を整備した矢先で震災が起きたのです。

「再開できたのは、釜石工場一つだけでしたが、これから業務系は学校給食などに絞り込み、自社ブランドの直販に思いっきり力を入れていく、と腹をくくりました」。この決断が功を奏し、翌年、会員数は約1万5000人に増えていきます。

顧客情報やピッキング さらに広告宣伝にも力を注ぐ

「通販事業をもっと伸ばすには、お客様の情報管理のやり方がボトルネックだと気づいたので」。

以前はエクセルで顧客情報を管理していましたが、いつの間にか一人のお客様のファイルが複数に。どのフ

イルが正しいのかと迷っているようでは仕事になりません。そこで電話番号で瞬時にお客様の情報をチェックできるシステム構築をプロに依頼。システムに詳しい社員も雇用し、コールセンターを立ち上げて専門に担当してもらっています。

「もう一つの課題はピッキングです。毎月メニューを変えた旬の商品を8食セットと16食セットで販売していますが、詰め合わせだけで結構な場所と労力を要します。外部の会社に協力してもらっていましたが、これ以上はもう限界だと。そんなとき、ヤマトさんが「うちでお手伝いできますよ」と声をかけてくれたんです」。岩手主管では、障がい者福祉施設とも連携し、対応しました。

「作業の様子を拝見させていただくととても手際が良く、これならすべてをお任せできる、安心してお客様を増やせると確信しました」。

5年前には大榎工場を再建。新たに東京に営業所も設け、生産・営業体制を強化しています。さらに、全国紙の新聞からテレビ、WEBまでを駆使し広告宣伝も展開。会員数は、5年前に3万人を、2021年には4万人を超えるまでに。現在、通販による直販事業の売上は、10年前の約10倍の約23億円と、当社事業全体の約7割にまで拡大しています。

「いまはコロナ禍で学校給食や外食産業の需要が激減するなど厳しい状況ですが、それを上回るだけ直販がしっかりと伸びていますよ」。

小野食品(株)データ

	当時 (2011年度) (単位:千円)	現在 (2019年度) (単位:千円)
売上高	689,829	3,272,027
業務用	340,900	825,966
おせち	117,264	118,034
直販	231,665	2,328,057
	当時	現在
頒布会顧客数	9,400人	41,857人
従業員数	54人	131人



勉強あるのみですね、と研究熱心な小野社長



ヤマト運輸北上物流センターで、小野食品の梱包作業を行う障がい者施設のみなさん



常時1℃の殺菌海水で魚を傷めずに鮮度を保持できる殺菌冷海水装置を、新浜町魚市場（30t）と新浜町第2魚市場（20t）にそれぞれ導入

釜石市
魚市場経営基盤
再生事業
（岩手県）

助成概要

- 魚市場の水揚げ機能確保対策の水供給施設（移動砕氷車）、衛生管理施設（殺菌冷海水製造装置）の整備費用
- 申請団体：釜石市漁業協同組合連合会
- 助成金：1億8,550万円

助成当時

「魚のまち・釜石」復活へのプロローグ

衛生的な各種設備を備えた水揚げしやすい二つの市場

「震災で失った釜石市魚市場の水揚げを取り戻すためには、これからの時代に対応した衛生的な市場環境が必要だ」。釜石市漁業協同組合連合会（市漁連）は、本助成を活用し、震災から5カ月後に再開した第2魚市場に移動式砕氷車両と20t

そしていま

企業や大学と連携し可能性を拓く

衛生的な魚市場で水揚げ量を養殖で新たな釜石の魅力

「大日本水産会の優良衛生品質管理市場・漁港認定を取得して

ます。認証には水回り処理が重視されますが、殺菌冷海水装置を魚河岸魚市場および新浜町魚市場に導入したことが高く評価されました。おかげさまでより多くの巻網船などが、釜石市魚市場に水揚げしています」と釜石市水産農林課主幹兼水産振興係長の立石 孝さん。しかし、地元定置網が主とする秋サケの水揚げは年々減少しています。温暖化でこれまで獲れていた

の殺菌冷海水供給装置を導入。翌年には、新浜町魚市場に30tの殺菌冷海水装置も備え、廻船大型巻網船も安心して水揚げできる体制を整えました。「氷の消費が激しい夏季は移動式砕氷車両が大活躍。市場内を走り回り素早く氷を供給する姿は、見学の漁港関係者が見とれるほどです」と当時の市漁連の原田 祐吉参事は話していました。

魚種が次第に獲れにくくなり、逆にイワシや今まで少なかったサワラは獲れるようになってきていますが、このままだと今年は震災前の30億円近い水揚げに届きません。「他力本願や自然本願ではない。立石さんたちは、新たな釜石ブランドを創り出そうと、大学・企業・漁協・釜石市で組織するコンソーシアムを結成し、サクラマス養殖の研究を進めています。

「釜石の水産で何か新しいことがはじまった」と感じた漁業者たちが「俺たちもなにかやってみるか」と動き出す。そんな相乗的な流れにしたいと思っています」。

釜石漁港データ

当時（2010（平成22）年度）

水揚数量 16,144t
水揚金額 2,858,896千円

現在（2020（令和2）年度）

水揚数量 10,854t
水揚金額 1,581,579千円



左から釜石市産業振興部水産農林課水産振興係主事の加藤直人さん、主幹兼水産振興係長の立石孝さん、釜石市漁業協同組合連合会参事の佐々木敏行さん



助成先のいま

農業



農業(基盤別)

5件: 24億9,701万円

宮城県	農業生産復旧緊急対策事業	13億2,201万円
福島県	JAすかがわ岩瀬農業生産再生事業	2億7,500万円
	川内高原農産物栽培工場建設事業	3億円
	農地復旧復興(純国産大豆)プロジェクト	3億円
	地域農業再生基幹施設緊急整備事業	3億円

川内高原農産物

栽培工場建設事業

(福島県)



●工場概要…鉄骨造、完全人工光型(完全閉鎖型) ●建築面積:2467.10㎡/敷地面積:5009.10㎡
 ●栽培面積:4324.8㎡(9.01㎡×8段15ライン×4室) ●目標雇用人数:25人
 ※川内村が共同出資し設立した(株)KiMiDoRiが工場を運営

助成概要

- 安全できれいな地下水を利用した水耕栽培工場の建設費用
- 申請団体:福島県川内村
- 助成金:3億円

助成当時

安心して帰村できる復興のシンボル

村の自慢の地下水を使った最新鋭の水耕栽培工場を建設

「野菜の工場とは思えない。まるで精密機器工場のような雰囲気だ」。2013年4月、川内高原農産物栽培工場のオープニングセレモニー参加者から感嘆の声が漏れました。工場内は、太陽光の代わりにLED照明で紫色の光に輝いています。四つの栽培室にそれぞれ15の栽培ラインを備え、1日で最大8000株のリーフレタスやハープを栽培できます。

そしていま

風評被害を跳ね退けた工場産の野菜

安全・安心を数字で示し、少しずつ信頼の輪を広げる

内陸部にある川内村は地盤も強く、震災で大きな被害は受けていません。リーフレタスやハープを栽培する。リーフレタス以外にセルフィーユなどのハープ類も加えた約10種類の野菜を、それぞれに適した環境の部屋で栽培しているんです」と技術開発部長の兼子まやさんと開所当時は、LEDの値段が高く設置費用で苦労しましたが、電気代は蛍光灯の4割減と経済的です。「この8年間、最も苦労したのは、風評被害をいかに払拭するかでし

2021年春、オープニングセレモニーから約8年ぶりに福島県双葉郡の川内村へ。工場内の鮮やかな紫色の照明の下に並ぶのは、瑞々しく美しく、そうなりーフレタスです。「現在、紫色のLEDの部屋と黄色の蛍光灯の部屋が2室ずつあり

せん。しかし、第一原子力発電所から30km範囲にあり、住人は全村避難を余儀なくされます。そこに追い討ちをかけたのが放射能汚染による風評被害でした。「除染が進み、避難解除されても村には戻れない」。そんな声を聞いた村長や村役場の職員は、阿武隈高地から湧き出る豊かな地下水と培養液を使ったコンピュータ制御の工場で水耕栽培を計画しました。「安心安全な美味い高原野菜を川内村の新しいブランドとして立ち上げ、復興の原動力に」。そんな願いを込めて助成を申請し、川内高原農産物栽培工場は動きはじめました。



2013年4月26日、遠藤村長(左から3人目)の宣言のもとオープニングセレモニーを開催。当財団からは有富元理事長(左)も出席しました



助成を申請し、村の復興を進める川内村役場



2018年には、食の安全や環境保全に取り組む農場に与えられる「JGAP」の認証も取得しています

自分たちができることを地道に積み上げ、工場で生産する野菜の信頼性を伝えてきた結果、福島県で展開するスーパーマーケットや生協が復興を応援したいと名乗りを上げ、事業は軌道に乗っていきます。そんな頑張りが復興の旗印になりました。

「現在、約8割の方が村に戻ってきています。震災前に200haあった農地も170haまで回復。国が営農再開を支援するプロジェクトから補助金も出て、工場開所当時は二つしかなかった集落営農組織も五つに増えました。いまは団体で耕作放

農業をはじめ若い世代に野菜工場の強みを教えたい

「土と太陽で育てる野菜のイメージが根強い中、地下水と培養液と照明管理で栽培する工場の野菜へ切り換えていただくために、どうすれば良いのか。食品衛生的にも安全であることを伝えようと、生菌数や大腸菌群数を測れる機械も購入。他にも第三者目線で安全性を担保できるようにするなど、総合して安心していただける工夫をしていきました」。

た。地下水が放射能汚染されていないことを数値で証明し、理論的には理解いただけでも、契約に至るまでには結構時間がかかりました。そこを辛抱強く一社一社の信頼を勝ち取り、導入いただけてきたのです」。

当時はまだ植物工場の野菜が珍しく、そこにも大きな壁がありました。

「うちの野菜は、衛生的で見た目も綺麗で洗わなくても食べることができます。値段がやや高くてもそんな商品を求める消費者を抱えるスーパーなどに、台風でも、雨や日照りが続いても安定供給できる工場のメリットをアピールしています。そういった強みも含め、8年間に蓄積してきた知識と技をすべてお教えします。ただし、いくらコンピュータ制御と言っても、植物は自分で歩くことはできません。タネを蒔き、収穫し出荷するなどは、自分たちで額に汗して頑張るしかありませんよ」。

「なによりうれしいのは、農業に挑戦したいと言う若い世代が増えてきたこと」と兼子さん。工場には、地元以外にも県内外の農家や農業法人が多数研修に訪れています。

「農業には、作物ごとに栽培環境を整えるなどのマメな管理が必要ですが、工場ならコンピュータで的確に制御できます。まずはうちで働き学んでいけば、農業は向いていないとあきらめていた人も、安心してはじめられるはずです」。

「土と太陽で育てる野菜のイメージが根強い中、地下水と培養液と照明管理で栽培する工場の野菜へ切り換えていただくために、どうすれば良いのか。食品衛生的にも安全であることを伝えようと、生菌数や大腸菌群数を測れる機械も購入。他にも第三者目線で安全性を担保できるようにするなど、総合して安心していただける工夫をしていきました」。

「なによりうれしいのは、農業に挑戦したいと言う若い世代が増えてきたこと」と兼子さん。工場には、地元以外にも県内外の農家や農業法人が多数研修に訪れています。

「農業には、作物ごとに栽培環境を整えるなどのマメな管理が必要ですが、工場ならコンピュータで的確に制御できます。まずはうちで働き学んでいけば、農業は向いていないとあきらめていた人も、安心してはじめられるはずです」。

川内高原農産物栽培工場データ

当時(2013年)

生産量 …………… 4t/月
売上高 …………… 500万円/月

現在(2021年)

生産量 …………… 10t/月
売上高 …………… 1,200万円/月

※現在の数値は、ピーク時の数値。



「主力のリーフレタスの他にハーブ類なども生産。バジルペーストなどの加工品も製造しています」と話す工場の技術開発部長の兼子まやさん(中)、川内村産業振興課長の秋元敏博さん(右)、同係長の箭内浩さん(左)



農業生産復旧緊急対策事業

(宮城県)

助成概要

- 営農再開を目指す93事業体の農業機械の整備
- 申請団体：宮城県
- 助成金：13億2,201万円

助成当時

93の農業生産者の復活を後押し

津波で流された農業機械や栽培用ハウスを助成で購入

宮城県を襲った津波は、多くの田畑や栽培用ハウスをあっという間に押し流しました。その中には多額の返済が残る農業機械なども。「それでも負けてはならない」と再起にかける農業生産者93事業体を、宮城県が本助成に申請し応援。県内の農地1万3000ha、水稲約7万1020ha、園芸924haなどを対象に計13億2201万円の助成金を

でハウス再建やトラクター、コンバインなどの購入を支援しました。助成先の農家のもとを巡り歩いたのは、震災から約1年2ヵ月後の田植えが終った水田に初夏の風が心地良く吹き渡る5月の中旬です。「こんなに早く農業を再開できるなんて」と歓迎してくれたカーネーションやトマト農家。「クリスマスの出荷に間に合い、取り引き先の信頼をつなぎとめた」と話すいちご農家など、助成を活かし再生の第一歩を踏み出していました。

そしていま

「ここからすべてはじまった「山元いちご農園(株)」

最新設備のいちご栽培にこだわった復興への決意

震災前、山元町は仙台いちごの大産地として賑わい、海岸線沿いを走る街道・通称「ストロベリーライン」の周りには、見渡す限りいちごのハウスが広がっていました。2万棟近くあったハウス、約96haの農園の約95%が津波の被害に遭ってしまいました。現在「いちご王国」と呼ばれるまでに復興した立役者の

一人が、山元いちご農園(株)です。塩害で土地も地下水も使えなくなり、土を使わない高設溶液栽培に切り替えました。その中でも山元いちご農園(株)は、完全コンピューター制御で夜もライティングし、日照時間を管理する最新の栽培スタイルを取り入れています。「11月から3月まで照明を点けています。太陽光と照明の調整により光合成をし、根から養分を吸収することによって大きくて美味しい



泥の中から自然に花を咲かせ“津波に負けないカーネーション”として話題になった名取市のカーネーション。九つの花卉農家が本助成を活用しました



宮城県内のトマトやいちご、お米などを生産する93の農業生産者が、本助成で営農再開に必要な農業機械や設備などを整えました



助成を活かして最初に建てた8棟(約1万7000m²規模)のハウスは、温度や炭酸ガス濃度をコンピュータ管理できるようにしました

じいちゃんの代から続くいちご栽培を若い社員たちに

いちごができます」と岩佐さん。当時、1棟20a・8棟のハウスを建設するのに総工費は約4億6000万円がかかり、約3億円もの追加融資を受ける必要がありました。しかし、個人ではとても融資してもらえないと、3軒の農家で株式会社を立ち上げ、岩佐さんは代表取締役になります。そこまでは設備にこだわったのは「親や祖父たちの代から築いてきた山元町のいちご栽培を一刻も早く復活させ、必ず成功させてみせる」という強い信念があったからでした。

「国の助成だけではまったく足りなかったため、本助成は本当にありがたかったですね。この施設が私たちの原点。すべてはここからはじまったと思っています」。

震災から10年、2021年4月に訪れると、ハウスの規模は当時の約2倍にもなっていました。

「最初は1万6000m²からスタートしましたが、少しずつ広げていき、現在は3万2000m²(東京ドーム0.7個分)まで拡張しています。設備面もより最新のシステムを取り入れているんですよ。そう話しながら岩佐さんは、スマートフォンを取り出すと、操作画面を見せてくれました。

「こんな風いつでも離れた場所からでもスマホを使ってハウス内の

栽培環境をチェックできます。企業さんと手を組んで、温度や日照時間、さらに炭酸ガスの濃度まで見える化を進め、完全に自動制御できるようにしているんです」。

岩佐さんたちは、新たに設備投資の融資も受けながら、この10年間、つねに足取りを緩めることなく挑戦し続けています。その目は、自分たちだけではなく、山元町の農業や地域の未来をも見据えてきました。

以前訪れた際はまだ一部だった山元町の農地整備事業も、いまは若い世代が中心になり全域で進行。米、長ネギ、サツマイモなどの収穫量も着実に増産できています。

「創設時はたった4名の社員でしたが、いまは約48名が働いています。他の農園は人件費を考えると、どうしてもパート中心になると言えます。でも私たちは正社員雇用にこだわりたい。若い後継者をしっかり育てていきたい。じいちゃんの代から続くこの土地で農業を盛り上げ、次の世代へとつなげていくことが、私たちの大切な使命ですから、決して譲ることはできません。そのために固定した形でちゃんと収入が得られるように、生産体制や品質の向上に設備投資をしてきましたし、取引先・販売先の開拓にも力を入れていきます。また、障がいのある方も故郷で働くことができる環境づくりにも貢献できるように、福祉施設も立ち上げました」。



教科書で紹介された山元いちご農園の記述に見入る山内理事と岩佐社長



「春にイチゴ狩りで訪れる観光客は、町の重要な観光資源となっています」と岩佐社長(写真右)



山元いちご農園(株) データ

	当時(2011年)	現在(2021年)
いちご総生産量	20t (もういっこ)	160t (もういっこ、とちおとめ、 紅ほっぺ、にこにこベリー)
総売上高	1,500万円	1億7,000万円
圃場(ハウス)	16,000㎡ (8棟)	32,000㎡ (10棟)
来場者数	約1,000名	約24,000名
従業員数	4名	48名



販売店や農園で働く従業員は、わずか4人からこの10年間で48人まで増えました

六次産業化の好事例として 中学校の補助教材に

農業を夢のある産業として発展させていくために、岩佐さんは、さまざまな取り組みを続けてきました。

「設立時から六次産業化を目標の一つに掲げています。なんとと言っても、いちごは鮮度が命です。収穫し終えたら契約したスーパーなどに短時間で納める工夫をしています。すし、消費者にいちご狩りに来ていただき、より美味しく食べていただくようにもしています。しかし、それだけでは収穫したすべてのいちごを捌き切れません。そこでジャムなどに加工する術が必要になります」。

震災前は、岩佐さんの後輩が経営する宮城県唯一のワイナリーがあり、そこでジャムも製造してくれていました。しかし、津波で後輩は命を落とし、ワイナリーも崩壊しました。

「彼の夢を残された我々の手で受け継いで行こうと、仲間たちと心に決めたんです。でも素人ではワイナリーをそう簡単に再建できず、5年くらい悪戦苦闘してきました。でも無事に完成したら、出荷できないいちごを10数tもここで加工できたんです。これには周りの農家も町役場のみなさんが驚いていました」。

現在、町をあげて農業の六次産業化を進めています。その先陣を切った苦労された岩佐さんたちのエピソードは、小学校の社会の教科書

に掲載されています。

「他にもお菓子の工房やカフェなども運営しています。これが、農業の新しいあり方・六次産業化の事例として取り上げられました」と照れくさそうに岩佐さんは話します。

生産者自ら考え行動する それが産地の生き延びる道

しかし、今度は新型コロナウイルスという新たな敵が、岩佐さんたちの目の前に立ちふさがっています。

「原発事故の風評被害から少しずつ立ち直り、いちご狩りの入園者数は7万7000人と震災前より増えていました。ところがコロナ禍で、昨年はその半分以上に減ってしまったのです。海外も視野に入れて販路を広げていますが、この先を考えるといちごばかり頼っているわけにはいきません。ワインに適したブドウ、農園の新しい顔となるシャインマスカットやメロンも試験的に栽培しています。でも納得できる品質に育てるには、土壌などまだ改善しなければならぬ点が多い。産地が生き延びていくには、生産者自らが考え、行動することこそ大事だと思っています。私たちは、震災ですべてをなくし、ゼロから再スタートしました。だから故郷への、復興への思いはだれよりも強い。次の世代の子どもたちのことも考えながら、ずっと歯を食いしばり、この10年間やってきたつもりです。コロナなんかには負けてはられませんよ」。



パームクーヘン製造工房



後輩の夢を叶えるために再建したワイナリー





イグナルファーム大郷のトマトハウス。自動選別機や走行無人搬送車なども備え、近い将来は収穫をロボットに、それも夢ではありません

明日はもっとイグナルように「(株)イグナルファーム」

津波で家も家族も失った
仕事まで奪われてたまるか！

次に向かったのは、山元町から石巻方面へ北上した東松島市の(株)イグナルファームです。

トマト農家の阿部 聡さんは家や農地、そして最も大切な家族も津波に奪われました。一時は生きる希望を失いかけてますが「仕事まで津波に奪われてたまるか」と奮起します。阿部さんは、2011年12月に佐藤雄則さんをはじめ4人の仲間と(株)イグナルファームを設立。代表取締役就任すると、いしのみき農業協同組合が支援する園芸用貸付ハウスに申し込み、約3000坪の土地・3棟のハウスに本助成で農業機械なども整え、再出発を果たしました。

8年前に訪れたとき「イグナルとは、この地域の方言で「良くなる」と言う意味なんです」と阿部さんは教えてくれました。当時は、ミディアムトマトという珍しい中玉サイズを柱に、売上目標は坪250000円。今後は、4人がそれぞれ培ってきたノウハウを活かしてキュウリ、ネギ、いちごの栽培もはじめる計画だと話していました。あれからどうイグナル「ことができたのでしょうか。」

「いまはキュウリの高設栽培を(株)イグナルファームで、トマトは

(株)イグナルファーム大郷で、また地域の重要な観光拠点としての役目も担ういちご農園と、分社化して展開しています」と説明してくれたのは、現在イグナルファームグループ全体の社長を務める佐藤雄則さん。全体の規模もキュウリ1.2ha、ミニトマト1ha、イチゴ1.4haと、大幅にスケールアップしています。

現在(株)イグナルファーム大郷の社長を務める阿部さんは「卸さんやバイヤーさんが、サラダの原料に使う際、カットをしないで済むミニトマトの方が良いということで、思い切ってミディアムトマトから方向転換しました」と話します。

その数は約2万5000本。ミニトマトだけを約1haの栽培規模で展開しているのは、県内ではイグナルファームだけです。キュウリは、収量品質の向上を図るため、3年ほど前に土耕栽培から高設のベンチ栽培に変更。1.2haもの規模でキュウリの高設栽培を行っているのは、全国的にも珍しい事例です。

作物も人もITで優しく管理
まさに未来を先取りした農園

この大規模なキュウリ、トマト栽培を成功させるため、グループ全体で最新のIT化が進んでいました。

阿部さんにイグナルファーム大郷のハウス内を案内いただくと、そこ



「トマトもキュウリも各人の得意とするノウハウを活かしてより高い品質と生産量に工夫しています」とイグナルファーム大郷の阿部社長

助成先のいま「農業-2」



「IT化・機械化を図った最新鋭のハウスで、温度・湿度から日照量やCO₂の管理もすべて自動的に行えます」とイグナルファームの佐藤社長(写真右)



佐藤さんは「ヤマトさんに支援いただいた(株)イグナルファームの3棟のハウスも同様のシステムで、大規模なキュウリの高設栽培を効率的に行っていますし、いちご農園のIT化も進めています。大胆に会社組織の変革やIT化を図ってきた目的の一つは、若い世代により動きやすい夢のある農業を見せたいから

もつと「イグナル」のために 若い後継者たちと次の一手を

また、蓄積した栽培・収穫データから1年間の需要変化を予測し、各月の生産を無駄なく計画すること。さらに驚くのは、全社員の作業状況も把握。各人の作業データをもとに適材適所に人員を配置し、効率的な作業指示をスマホを使ってできるようにしていることでした。

「国の「スマート農業実証プロジェクト」の採択を受けたコンソーシアムの一員として、SMART BRIDと呼ぶ新システムも導入。最高品質の野菜を栽培するためにハウス内の温度・湿度・日照量・CO₂の数値変化に合わせ、ハウスの窓の開け閉め、灌水量や肥料濃度の調節も自動化しています」と阿部さん。

「まだ坪250000円の目標に届いていませんが、それ以上を目指していきますよ。今日より明日が、もつとイグナルのように「美味しい食材を安定して供給していくための改善を続けます」と、お二人は今後の抱負を語ってくれました。

「いまこのコロナ禍で、さらなる変化が求められています。地元企業と商品開発してブランディングを進めたいし、ネットショップも立ち上げたい。やりたいことは山積みです。こうした夢も、私たちの考えに賛同してくれるいろいろな人たちとグループ化していくことで、きっと可能になっていくはずですよ。」

「4人の仲間と立ち上げた会社もいまや従業員数約60人に。地元の方たちだけではなく、ミャンマーなどの外国人実習生も受け入れています。」

はまさに「農業の未来工場」。ミニトマトの自動選別機や走行無人搬送車なども導入していました。自動選別機は、1秒間に15個のミニトマトを画像認識し、一粒一粒の糖度をチェック。今日は何万粒のミニトマトを収穫したかも把握できます。

「目の前の問題だけでなく、未来を見つめて社員教育を行うことが大切。私たちは、農業を通してグローバルGAPやSDGsという世界的目標に貢献していくことを経営理念やビジョンに取り入れていきます。これは経営者側が一方的に押し付けたものではなく、社員たちの考えをボトムアップし作り上げたクレド^{※1}としてみんなで共有しているんです。」

※1 クレドとは、ラテン語で「志・約束・信条」。全従業員が心がける信条や行動指針を示し、意識改革や教育につなげます。

(株)イグナルファームデータ

	当時 (2011年8月~2012年7月)	現在 (2021年7月)
総生産量	トマト:130t キュウリ:157t	ミニトマト:150t キュウリ:288t イチゴ:80t
総売上高	7,300万円	2億6,740万円
圃場	1ha	3.6ha
従業員数	12名	60名



コンピュータ管理することで、高い品質と生産性を保ち経営も安定してきました



震災後、本助成で備品などを整えたハウスでは、現在キュウリの高設栽培を展開中



生活・商工業 (基盤別)

生活 7件 40億 600万円
 商工業 3件 3億9,300万円

- 岩手県** 野田村保育所再建事業 3億1,900万円
 陸前高田市竹駒保育園の新設・再建事業 2億5,900万円
- 福島県** 相馬広域こころのケアセンター：なごみの新設事業 3,000万円
 よつくら港地域振興施設「交流館」復興事業 2億1,000万円
 「アクアマリンふくしま」熱源設備改修事業 8,000万円
 相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業 1億 300万円
 公立小野町地方総合病院整備事業 20億4,700万円
 鹿島厚生病院併設介護老人保健施設厚寿苑の新設事業 10億3,000万円
 榎葉町 仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業 1億9,100万円
 福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業 1億3,000万円

よつくら港

地域振興施設

「交流館」復興事業

(福島県)



安心・安全なよつらの農水産物を発信し、地域活性化の拠点として生まれ変わった交流館。オープンから半年だけで30万人以上の方が訪れました

助成概要

- いわき市四倉漁港の道の駅に、地域農水産物の販売と地域情報の発信基地となる施設を改築
- 申請団体：特定非営利活動法人よつくら
- 助成金：2億1,000万円

助成当時

復興にかける市民の期待にこたえて

地元農水産物の販売拠点・働く場・交流の場としての機能

2012年8月、(NPO)よつくらが運営する『道の駅よつくら港「交流館」』のリニューアルイベントは、復活を待ちわびた多くの地元市民や観光客が詰めかけ、行列ができるほどの大盛況になりました。

交流館は、地域の新鮮な農水産物の販売拠点であり、直売所やレストランは地元の雇用の場に。また、人々の大切なふれあいの場としても愛されてきましたが、地震により機能の大半を失います。

「食物もままならなかった被災直後は、会津から野菜などを分けてもらい、交流館で炊き出しを行いました。温かい食べ物を手に喜ぶみなさんの笑顔を見て、なんとしても交流館を再開しなければと誓ったの

そしていま

交流を広げ飛躍へのヒントに

先代理事長と育んできた人的交流と物的交流を柱に

約9年ぶりに訪れた交流館。オープン時の人混みに比べると、コロナ

です」と佐藤雄二理事長(当時)。

生まれ変わった交流館は、黒と赤を基調にしたお洒落な外観の鉄骨作り。1階は地元特産物などの直売スペースに、2階は地域の食材を使った食事を楽しめるフードコートになっています。また、震災での教訓を生かし各種防災設備も完備。緊急時には2階が避難所になり、加工食品などの非常食も備蓄しています。

交流館外側の柱には「海がすき、約600枚の陶板には「海がすき、四倉がすき」「明るい未来をつくらう」「幸せは、ころの中」など、復興を願う市民のメッセージが並んでいます。その言葉を噛み締めながら「この交流館が地元復興のシンボルとなるように、みんなで力を合わせて盛り上げていきましょう」と挨拶する佐藤理事長に、来場者から惜しめない拍手が贈られました。

禍でやや寂しく見えますが来場者の数は変動しているのでしょうか。

「これまで年間40万人以上の来場者がありました。緊急事態宣言が出て昨年は約37万人の動員数



「よつらの魅力をたくさんの方に知っていただき、風評被害を跳ね返けみんなで立ち上がっていきたい」と陶板の前に話す佐藤理事長(当時)



復興のシンボルであり、地元の方たちの憩いの場として愛され続ける赤と黒のコントラストが鮮やかな交流館

となり、毎年約15%減少しており「まず」と駅長の白土健二さんと、現理事長の伊藤浩一さん。先代の佐藤理事長は、58歳と言う若さでお亡くなりになっていました。

「佐藤さんは、ヤマトさんをはじめ多くの方の応援があつてこそ立ち直ることができたのだ。そのつながりを忘れてはいけないし、大事に育てていこう」といつも話していました。その意志を継ぎ、いまでもみんなで力を合わせて頑張っています」。

交流館は、震災当時から会津の三島町、北塩原村、天栄村、郡町。また、東京の港区などと地域間交流を行っています。

「再開時は、原発事故による影響もあり、水産業も農業もすぐに立ち直れない状況でしたから、ここで販売できる商品も食事を作る材料もまったく不足していたんです。そこをみなさんの応援でなんとか運営することができました。現在もその絆は生きていて、定期的に交流祭などを開き、互いに地域活性化のアイデアなどを話し合っているんですよ」。

お二人が佐藤さんとともに築いてきた人的交流、物的交流の二本の柱は、いまでも交流館を支える原動力として息づいています。

**馴れ合いや妥協をせず
よつくらの魅力を高める**

1階の直売所に並ぶ商品、2階フードコートの店舗の顔ぶれは、再

開したときと随分変化しています。

「いまだに原発事故による風評被害に悩まされているのは事実です。山菜系はずっと自粛がかかったままで、新潟のみなさんに助けていただいています。でも正直な気持ちを言えば、この町には海も山もあるのだから、故郷の産物だけで勝負をしていきたい。でも大切なのは品質であり、お客様に喜んでいただくこと。仲間内だからといって妥協はしません。消費者に魅力あるものを厳選して取り扱っています。4店舗のテナント管理もシビアに売上などを調査し、必要であれば入れ替えも行い、客離れや味離れを防いでいるんです」。

これから交流館の目玉の一つにしたいと話すのが、活ホッキ貝。震災前は、ホッキ貝の直売所があり大人気でしたが、海洋汚染問題でなかなか復活できなかった。でも昨年、試験的に水揚げがはじまったんです。本操業したあかつきには、ここで売出すことが長年の夢。出店場所もすでに確保してあります」。

今後は通販も開始したいと、ECサイトを立ち上げるために、ホームページをリニューアル中です。「交流館の前には、防潮堤が築かれています。あの向こうには、波打ち際がきれいな白い砂浜が30kmくらい続いています。真っすぐに港とつながる美しい風景を、よつくらの海の幸・山の幸と一緒に、多くの方に楽しんでいただきたいと願っています」。

交流館データ

当時(2012年度)

来場者数 …… 年間約 40 万人
売上高 …… 330,000 千円
営業収入 …… 11,500 千円

現在(2020年度)

来場者数 …… 年間約 37 万人
売上高 …… 311,500 千円
営業収入 …… 8,800 千円



旬の味を堪能できるホッキ祭り。よつくらの新しい観光の目玉にと期待されています



「高齢化や風評被害など課題は山積みですが、他県の事例も参考にしながら地域活性化の拠点として頑張り続けたい」と白土さん(左)と伊藤さん(右)

陸前高田市

竹駒保育園

新設・再建事業

(岩手県)



竣工式の前日、無事に卒業式を開催でき、11名の園児が新園舎から巣立っていきました

助成概要

- 流失した保育所を安全な高台に再建する費用を助成する
- 申請団体：社会福祉法人陸前高田市保育協会
- 助成金：2億5,900万円

助成当時

ピカピカの新園舎で卒園式を

国から助成は出なくても
新園舎は広々と安全な高台に

川を逆流した津波は、海から6kmも内陸にある竹駒保育園にまで到達しました。「園長先生や保育士さんが、子どもたちの手を引き、抱きかかえ、山に避難してくれたおかげでみんな無事だったのです。水が引いたあと、保護者も集まり保育園の掃除を行いました、大人の胸の辺りまで津波が来ていたとわかり、ゾッとしました」と振り返るのは当時父母の会長だった大阪英人さん。

「これからは、安心して子どもたちを預けられる場所に、新しい保育園を建ててほしい」。そんな保護者の願いにも応えるため、以前より10mほど高い場所に新しい土地を確保しました。しかし、原形復旧が原則の国の補助は得られず、移転計画は難航します。そこで(社福)陸前高田市保育協会は、本助成に申請し、新園舎の建築を開始しました。

完成までの間、子どもたちは仮設園舎で過ごすことになりましたが、仮設園舎の園庭は狭く、満足を遊べ回ることができません。また、離れた地域に避難している子どもたちは、別の保育園に通い完成を待つことになりました。

「子どもたちがバラバラになっていたときも、先生方は各所に様子を見に行き声をかけてくれるなど細かくケアしてくれました。子どもたちが笑顔でいられたのは、先生や地域のみなさんの優しさに見守られ続けていたからにほかありません」と大阪さんは感謝しています。

当時の園長の村上和加恵さんは、「卒園式までに完成をと建設会社は無理なお願いをしました。子どもたちに早く作って頼まれたらやるしかないでしょう!」と頑張っていたが、無事に新園舎で卒園式を開催できたのです」と話します。

竣工式前日の3月28日に、ピカピカの新園舎で行われた卒園式で、男児6人、女児5人の計11名が巣立っていきました。

「いままでたくさんの方を教えてくださいました園長先生や先生方、おいしい給食を作ってくださいました給食の先生、いつもそばで応援してくれましたお父さん、お母さん、本当にありがとうございました。そして世界中から心のこもったプレゼントをありがとうございました。これからもありがとうございました。これからもありがとうございました。忘れず、小学校に行っても羽ばたきます」。そんな子どもたちの挨拶に、保護者も先生方も涙を抑えることができ



卒園者一人ひとりに保育証書を手渡す村上園長(当時)



11人みんな揃って竹駒で卒園式を迎えることができました



竣工碑には被災の様相、助成の内容が記されている



新園舎は陸前高田市で初めて建設された公共建物

ませんでした。

3年ぶりにみんな揃って 新園舎で待望の運動会も開催

完成した新しい保育園は、木造平屋建てで建物は761㎡、敷地4061㎡。完成時の職員は14名、園児は50名です。園内の設備は、すべてバリアフリー仕様でLED照明器具や太陽光発電のソーラーパネルも装備。建設場所は、津波の心配を払拭するため、以前よりも標高で10mほど高く、約400m内陸に移動しています。

竣工式で、当時の陸前高田市保育協会の藤井喜八郎理事長は「みなさまのご協力を得て、立派な新園舎が完成しました。以前の約1.5倍と広く、子どもたちは伸び伸びと過ごすことができますし、お預かりできる児童数も70人まで拡大することができま。今後は、待機児

童が生じないようにより体制を整え、職員一丸となって保育園の運営に臨むつもりです」と感謝の言葉を述べました。

戸羽市長も「定員があふれるくらい子どもたちが集えるように、また子育てがしやすい環境を整えることができるように、行政としても応援していきます」と挨拶しました。

そんな竣工式から半年後、村上さんから一通の手紙が届きます。

「先日、広々とした園庭で運動会を行うことができました。全園児が揃う運動会としては3年ぶりです。

4・5歳児の鼓笛隊が会場を盛り上げ、子どもたちは家族の声援に後押しされ、最後までよく頑張りました。素敵な運動会を行えたことを心から感謝しています。」

手紙には、かけっこや鼓笛隊演奏などに張り切る園児たちの元気な写真も同封されていました。

そしていま

子どもたちの歌声が響く町へ

より多くの保育士を雇える 町の体制が整うことを願って

5年前の来訪では、村上さんの後任として当時園長を務めていた坂下睦美さんにもお話を伺いました。

「陸前高田市で一番早く大型の福祉施設として建設されたのが竹駒保育園です。地域の保護者だけ

ではなく、陸前高田市にとっても本当に明るいニュースとなったんですよ。震災前、陸前高田には10カ所の保育施設がありましたが、まだすべて再開できていません。この定員は50名ですが、70名まで受け入れられる容量があります。一刻も早く

多くの方が安心してお子さんを預けられるようにしたいのですが、問



全員揃って開催した運動会で園児たちは大活躍



5年ぶりに来訪したときも、子どもたちはかわいい歌声で歓迎してくれました

問題は保育士の数が足りないことです。1人の保育士で対応できるのは、0歳児なら3人、1歳・2歳児は6人、3歳児は20人、4・5歳児は30人までと決められています。また保育士が休まれたときに対応できるような、もう2・3人雇用しておかなければなりません」と坂下さん。また、もう一つの課題は、保育士たちの住まいです。

「盛岡や花巻の学校から新卒者を雇用しても、園の近くで通いやすい場所を探すのがひと苦労。新しいアパートが建つという情報が流れると、あつという間に契約が埋まってしまいます。故郷に帰ってくる者たちをもっと受け入れることができる体制が整い、地域みんなで子どもたちを育てていくことができるようになればと良いのですが」と坂下さんは話していました。

変わらないのは子どもたちの笑顔と美しく清掃された園内

そして2021年7月、久しぶりに竹駒保育園を訪ねた我々を歓迎してくれたのは、子どもたちのかわいい歌声でした。園舎で遊ぶ子どもたちに「なにをして遊ぶのが楽しい？」と声をかけると「ままごと遊びが大好き！」と元気な返答。約10年の歳月が経っても園内は美しく園庭が少し広くなりました。「子どもたちが安全・安心に過ごせるように、みんなで掃除をして大切に使い続けているんですよ」と職員が話し

ます。

今回お話を伺ったのは、陸前高田保育協会元事務局長の熊谷栄行さんと園長の村上さんのお二人です。

「あのとき助成いただけなかったら、子どもたちはここに帰ってくることはできなかったと思います。バラバラに分かれて他の保育園に通っている子どもたちが、この新園舎に笑顔で帰ってきてくれたときは、本当にうれしかった」と村上さん。

熊谷さんは「すべては村上さんがみんなを無事に避難させてくれたからこそ。あの当時、津波の避難訓練まで行っていないませんでした。子どもたちを守りたいという一心で、正しく迅速に行動してくれました」と話します。村上さんは「園庭に子どもたちを避難させたとき、道路を駆け上っていく人が見えませんでした。これはちよつとおかしいと、とっさの判断でもっと高台へと子どもたちの手を取り動き出したのです。でも津波がくるとは予想もしていませんでした」と振り返ります。その一瞬の判断が運命の分かれ道でした。

地域とのふれあいを大切に育みたい子どもたちと町の未来

現在、竹駒保育園の園児は40名と当時よりやや少なくなっています。「震災後、なかなか進まなかった宅地造成工事がやっと完成し、ここ数年で仮設住宅にいた方たちが、次々と新しい住まいに移られています。ここに通っていた園児の中にも



LED照明や天窓からの陽光、そして優しい木のぬくもりに包まれた明るい園内



10年が経ち中学生に成長した卒園生たちからは素敵なメッセージもいただきました

新天地へと引越した子どもがいまいた。そのため、家々が他の地域などに分散し、この町の出生数は減り、園児の人数も以前より少なくなってきたにいます。でも、乳児や未満児の早期預け入れは可能かという問い合わせは増えていますよ。若い保護者の子育てのお手伝いができる喜びを感じながら、保育士さんたちは毎日頑張ってくれています」と熊谷さんが説明してくれました。

そして「コロナ禍で地域の方々と交流は制限されていますが、地域とのふれあいはとても大切です。もともとたくさんの子どもの歌声がこの町に響き渡るように、さまざまな方と助け合っていける、そんな以前のような状況に戻れることを切に願っています」とお二人は話しています。

中学生になった卒園児が思う未来につなげたいバトンとは

あのととき卒園式を迎えた子どもたちは、もう中学3年生です。「うちの園児は、卒園後もここに遊びに来てくれる子が多いんですよ」と村上さんはうれしそうに話します。

当日、卒園した子どもたちは集まることできませんでしたが、当時の思い出を語るビデオメッセージを見せていただき、後日には、より詳しくいまの心境を記したメールもいただきました。

「仮設園舎の園庭は狭かったけれど、鬼ごっこをしたり、砂場で遊ぶのが面白かったです」「新園舎で地

域の方を前に鼓笛隊の演奏を披露したことも良い思い出」「小さかったせいか震災の記憶は鮮明ではありませんが、竹駒保育園の園歌はいつも覚えてます」。そんな子どもたちは、野球、テニス、バスケットボールなど部活動で大忙し。将来の夢もデザイナーや医療関係者、まだはつきりしていないが得意なスポーツや趣味に関わるなどから見つけていきたいなどさまざまです。メールの中には「ピカピカの園舎で、卒園式を迎えることができたい喜びはずっと忘れません」と感謝の言葉も綴られていました。

そんな卒園生の1人である佐藤頼さんの作文が、2021年3月に地元の新聞社の東海新報が開催した「20年後のふるさと気仙・中学生・高校生作文コンクール」で見事に入選しました。最後にその一部を抜粋してご紹介します。

「何十年経っても変えてはいけません、忘れてはいけぬものがあると思います。それは震災で大きな被害に遭ったこと。たくさんの方の命が奪われたこと。その分、たくさんの方の愛情を受け取ったこと。

私たちが宝物のように大事にしてくれている町の方々のように、今後は私たちが宝を守っていく番になります。私は陸前高田が大好きです。愛のバトン、優しさのバトン、希望のバトン。絶えることなく明るいミライへとバトンをいつまでも繋いでいきますように……」。

竹駒保育園データ

当時(2013年)

人数…… 70名定員

現在(2021年)

人数…… 40名定員



当時の卒園生からのビデオメッセージ



「子どもたちのかわいい笑顔に、ついつられて笑ってしまうね」と、山内理事長



福島県立自然公園 松川浦周辺の 海岸防災林 再生事業 (福島県)

助成概要

- 津波で流失した海岸防災林を再生するために、必要な樹木の地域性を考慮した「地域苗木」の育成と供給
- 申請団体：緑地創造研究会
- 助成金：1億3,000万円

助成当時

小さな苗木をいつか立派な防災林に

松川浦を地域の手で蘇らせる 世代をつなぐプロジェクト

風光明媚なこの地は、日本百景のひとつにも数えられていました。しかし、その様子は震災で一変。

2014年11月、約1500人の地元の方が参加し、相馬市松川浦周辺の植樹事業が本格的にスタートしました。「苗木はこうやって植えていくんですよ」。緑地創造研究会のスタッフの説明を聞きながら、大人に交じって地元の幼稚園、小学校の子どもたちも苗木を植えていきました。

「故郷の町を守ってくれていた美しい松川浦をなんとしても蘇らせた」。そんな地元の願いを受けて緑地創造研究会が、本助成に助成を申請。「5年間で計10万本のクロマツの苗木」を植え、松川浦周辺の海岸防災林を再生する計画を立てました。

福島県相馬市の松川浦周辺では、松川浦県立自然公園も含め1000ha以上の海岸防災林が津波により流出します。阿武隈高地から太平洋に注ぐ河口にできた大きな干潟は、万葉集にもうたわれた県内有数の景勝地。大小の島や岩が点在する

「今日植樹した苗木は、松川浦を再生する最初の1本です。立派な海岸防災林に育つには、まだ何十年かかるかわかりません。それでも子どもたちの世代、その先の世代へも受け継ぎながら、必ず松川浦を生き返らせてほしいと願っています」と立谷秀清相馬市長は挨拶しました。

そしていま

20年、30年後を担う子どもたちへ

植樹したのは害虫に負けない 強い生命力の「地域適性苗木」

「あのとき、地元のみなさんと一緒に植樹した苗木は、松川浦の自然環境にマッチし、クロマツの天敵マツノザイセンチュウ（松食い虫）にも強い抵抗性クロマツの苗木です」と

話すのは、緑地創造研究会の馬場崇さん。そんな特殊な苗木を用意することから、松川浦再生の長い道のりははじまりました。

「まずは福島県や相馬市、東京農業大学などの協力を得て、マツ苗種子の採種園を福島県林業研究センター内に整備しました。助成金を使って



「やがてこの1本1本の苗木が松川浦を蘇らせる大きな力に」と願ひ込めて植樹



採種園開設時に立てた看板(右)。2021年に訪れると、うしろに見える松が見違えるほどたくましい姿に



美しい故郷の風景として愛されていた松川浦の大洲海岸。津波に流されてしまひ建設記念碑が残るだけに(当時)

福島県林業研究センターに造成された抵抗性クロマツ採種園に全国から届いたクロマツを植えることから助成事業はスタート。採種園で開発研究したクロマツの種から育て、大きくなった苗木を松川浦に植樹



2015年に植樹した小さな苗木(ページ右)は、しっかり大地に根を張り、すくすくと成長していました(2021年4月同所で撮影)

全国からクロマツの苗木を約50種類も取り寄せ、センチュウを人工接種。生き残った強い樹だけを自然交配させ、より強い遺伝子を持つマツノザイセンチュウ抵抗性クロマツの種から苗木を育てていったのです」。

**防災林へと育てていくには
地元の方たちの協力が不可欠**

しかし、本当に大変なのはこれからです。5年間かけて約10万本の苗木を育て、段階的に植樹していくこと。さらに防災林として育つまでの管理には、もっと気の遠くなるような年月がかかること。それをみなさんの手で進めてほしいのだと、地元の苗木生産業者だけでなく、地域の方たちも集めて説明をしました。

「被災されてわずか1年、ずっと時間が止まっているような感覚の方もいらっしやいました。それでも地元の方が立ち上がらなければ松川浦の再生は実現できないと、心に刻んでいたのです」。

馬場さんたちは事前に現地調査を終え、松川浦周辺の海岸防災林の被害が大きかったのは、干潟状の立地のためクロマツの根が浅かったことが原因の一つであると究明。これを教訓に、盛り土による築堤も苗木の育成と同時に進行するように県を説得し、工事を進めていました。これにより、仕事を失った地域の方の雇用促進にも貢献できる事業計画として本助成に申請していたのです。

**緑のおじちゃんと呼んで
くれた子どもたちの手で**

2017年5月までに、馬場さんたちが地元の方たちと一緒に植樹してきた苗木は、総数10万1458本にもなります。

「緑のおじちゃんがまた来てくれたと、植樹で訪れる度にいつも私の横にくっついて離れないお子さんがいました。不思議に思っていたら、震災で父親が亡くなられたと先生が教えてくれて…。最後の植樹を終えたあと、交流会で子どもたちが踊りを披露してくれた中にその子を見つけたとき、感極まって泣いてしまいました。子どもたちの前で泣くことはできないと心に決めていたんですけどね。あの子もいまは小学校5年生くらいになったでしょうか」。

その後もモニタリング調査でここを訪れる度、クロマツの成育だけでなく、子どもたちの成長が気になって仕方ないと馬場さんは言います。

「ヤマトさんに支援いただきみんなで植えた復興の苗木が立派な防災林に育つのは、まだ20年も30年も先の話です。その1本1本にどんな思いが込められているのか。小さくてなにもわからなかった子どもたちもやがて理解し、きつと松川浦を蘇らせてくれると私は信じています」。

10年前の悲劇と、そこから立ち上がり、いまなお懸命に前に進む人々の姿を風化させないように…。私たちはこれからも見守り続けます。

苗木の植樹の経緯

年度	植樹本数
2014	26,600本
2015	28,941本
2016	45,917本
合計	101,458本



立派な防災林になるように、子どもたちの世代、その次の世代へと大切に受け継ぎ育てていきます



大人と一緒に子どもたちも小さな手で1本1本苗木を植樹。エリアごとに植樹を展開していきました

製氷・貯氷施設回復支援事業（岩手県）

第2次

●助成概要：県内で最も水揚量が多く、魚市場の再開の早い大船渡魚市場の製氷施設、貯氷施設の整備費用を助成 ●申請団体：岩手県 ●助成金：2億4,646万円



大船渡市漁業協同組合は、製氷工場の再建、フォークリフトやダンプ車両、ウニ集荷用の海水滅菌装置、漁船巻き上げ機などの導入に本助成を活用しました。これらは、当組合の事業運営に欠かせないものとして現在も使用しています。現在の売上高は、震災前をわずかですが上回ることに。今後も助成いただいた施設や機器を活用し、組合員の経営や生活を守るための事業を推進します。

他にもこんな
助成先から
10年目の報告が
届きました

製氷・貯氷施設回復支援事業（岩手県）

第3次

●助成概要：県内13魚市場の衛生管理高度化による、市場機能の早期回復のため、製氷・貯氷施設の整備費用を助成 ●申請団体：岩手県 ●助成金：7億3,414万円

久慈市漁業協同組合が助成で整備した「製氷貯氷施設」は、現在も必要不可欠な施設として活躍中です。近年は海水温の上昇傾向などから魚類、ウニ、アワビなどの水揚げが低迷。コロナ禍の影響により、浜値にも大きな影響が発生し、利用量は減少しています。今後は地元定置網船、イカ釣り船の利用拡大、現在取り組んでいる「旋網船」（大型船）の継続誘致を積極的に推進する計画です。



水産業共同利用施設 復旧支援事業（岩手県）

第3次

●助成概要：水揚げされた水産物の流通機能回復のため、産地魚市場の水産加工場の整備（施設修繕、機器類購入）費用を助成

●申請団体：岩手県 ●助成金：8億3,840万円

三陸やまだ漁業協同組合では、第3次・4次の助成を活用し、養殖用機材、荷捌き施設・保管作業施設の海水給水設備、漁具倉庫の修繕、漁船上架施設の修繕、漁協事務所の修繕、漁具漁網運搬車両を整備。いまま現役で稼働中です。現在、カキ養殖がコロナ禍で慢性的な販売不振になり、定置漁業の主要魚種のサケはこれまでにない極端な来遊不足で漁協経営を圧迫しています。それでも新たにトラウトサーモンの海面養殖を計画し、経営回復・安定化を目指しています。

水産業共同利用施設 復旧支援事業（岩手県）

第4次

●助成概要：県内13魚市場と関連する漁業生産関連施設の水産物高鮮度流通に必要な給水及び殺菌設備、鮮度保持タンク、荷捌き設備等の整備・復旧費用を助成

●申請団体：岩手県 ●助成金：8億5,942万円

釜石流通団地水産加工業協同組合では、助成で購入したフォークリフト4台が、8年を経過しとうとう交換時期に。それでもパレット3,300個、サポーター3,300個は大事に使用中です。組合員の復興は進み冷蔵庫の在庫量も増え、売上は震災前の数字に届きつつあります。しかしここ数年サンマ、サケ、イカなど主原料の不漁が続き原料不足になり、海外での魚の引き合いも増加したため価格は高騰。今後は周囲の動向を注視しながら、在庫原料の軽量化など今後の改善策を思案します。

七ヶ浜町水産振興センター 建設事業（宮城県）

第4次

●助成概要：「海苔の種苗生産・品質改良」「魚類・貝類種苗の中間育成」など、水産振興の拠点である水産振興センターを3階建ての避難施設を有する施設に再建する費用を助成 ●申請団体：宮城県漁業協同組合 ●助成金：5億9,000万円

助成いただいた海苔種苗生産施設の種苗供給基地は、現在も宮城の海苔養殖生産組合員にとって「みやぎ寒流ノリ」の一翼を担う不可欠な存在として稼働中。生物種苗生産施設もナマコ、アサリ、ウニなどの種苗の生産・供給を行い資源管理型漁業に大きく貢献しています。今後も海苔種苗生産施設は、温暖化に伴う高温耐性種の取り扱いや宮城独自の種苗の開発に、生物種苗生産施設は種苗品種（魚種）並びに提供数量の増大を目指して、試験・研究を進めていきます。



農地復旧復興（純国産大豆）プロジェクト（福島県）

第4次

- 助成概要：津波により被災した農地を復旧し、新たな農業経営（大豆の生産・加工・販売）に取り組む農業法人が使用する農業機器類を購入する費用を助成
- 申請団体：福島県相馬市 ●助成金：3億円

（同）飯豊ファームは、市が助成で購入したトラクターなどの農業機械を貸与してもらっていましたが、2020年に譲渡を受け、自社保有となりました。現在は、大豆だけでなく米、小麦も生産。経営面積の増加に合わせながら、繁忙緩和のためにより栽培品目を増やそうと必要な設備投資も進めています。今後は経営規模が安定化傾向のうちに、収穫量の増加と作業の簡略化を図り、六次化商品の開発なども進める計画です。



JAすかがわ岩瀬農業生産再生事業（福島県）

第1次

- 助成概要：被災した6カ所の農業倉庫を1カ所に集約、再編することで地域農業の復興再生を図るための建設費用を助成する ●申請団体：すかがわ岩瀬農業協同組合
- 助成金：2億7,500万円

夢みなみ農業協同組合（旧すかがわ岩瀬農業協同組合）は、助成で被災した六つの農業倉庫を一つの低温大規模倉庫に集約。以前の常温倉庫では毎年5月になると低温倉庫へ移動していましたが、その経費削減を図り、温度上昇に伴う品質低下の懸念も解消しています。ベルトコンベア式放射能測定器とガンマ線測定機器はいまも健在で、効率的に放射能測定業務を実施。万全な保管・検査体制で安心安全な米を市場に安定して流通しています。



仮設水産加工場施設設備整備事業（宮城県）

第5次

- 助成概要：気仙沼市の仮設水産加工団地内で事業再開する10の水産加工事業体の水産加工場施設工事費用及び設備機器類購入費用を助成 ●申請団体：気仙沼水産加工業協同組合 ●助成金：2億1,700万円

当初は組合員を含め10の事業者が団地に入居していましたが、事業を軌道に乗せた4事業者が退去。現在は新たに3事業者が入居し、合計9事業者が活動中です。水揚げ量は回復基調でしたが、2～3年前からサンマやカツオなどの漁獲量の減少が目立ち、2020年は7万トンまで減少。振幅の大きい水揚げ状況に応じた対策とともに、事業者の高齢化を見越して事業継承や収益力強化など、新規起業者の増加策を検討しています。



相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業（福島県）

第2次

- 助成概要：応急復旧した代替岸壁での海上コンテナ物流用の代替クレーン及び集積機材（リーチスタッカー）の整備費用を助成 ●申請団体：相馬市
- 助成金：1億300万円

助成金で代替クレーンリース、クレーン用コンテナ吊金具の製作、リーチスタッカーを整備。震災でストップしたコンテナ定期航路の早期再開を果たしました。現在もリーチスタッカーは、ふ頭内の上屋内でのコンテナ貨物の積み下ろしに活躍しています。相馬福島道路などの高速道路路網が整備されるとともに新たな企業も増え、相馬港の取扱貨物量は震災前よりも増加。今後も相馬港の利便性と利用向上が期待されます。



地域農業再生基幹施設緊急整備事業（福島県）

第4次

- 助成概要：被災した5カ所の農業倉庫を2カ所に集約、再編することで地域農業の復興再生を図る改修費用を助成
- 申請団体：福島県東西しらかわ農業協同組合 ●助成金：3億円

震災で五つすべての農業倉庫を失い、さらに原発事故による風評被害という厳しい局面に立たされた福島県東西しらかわ農業協同組合は、本助成を活用して東西二つの地区の一つずつ新倉庫を建設。点在していた倉庫を統合することで物流の合理化を果たしました。現在も米穀保管倉庫として継続使用中であり、組合員の農地・生産量が回復することで、2020年度は米穀の保管量は3,443t、売上高も約16億円にまで伸びています。



「アクアマリンふくしま」 熱源設備改修事業（福島県）

第1次

●助成概要：年間100万人が利用する地域観光の中心拠点、いわき市小名浜の水族館「アクアマリンふくしま」の基幹設備である水槽温度管理の熱源設備の改修費用 ●申請団体：（財）ふくしま海洋科学館 ●助成金：8,000万円

助成で整備した熱源設備は、黒潮や熱帯の生物を展示する水槽の加温などに現在も使用。震災後いち早く助成をいただいたおかげで、再オープン後も安定した展示が継続でき、当館の復興を大きく支えています。来場者数は2011年度の25万8,244人から2019年度には53万3,459人に増加。現在、新型コロナウイルス感染防止対策を図りながら、季節ごとの魅力あるイベントを開催、新規展示の開発や既存展示の充実などに取り組み、来館者の増加につなげています。



野田村保育所 再建事業（岩手県）

第2次

●助成概要：流失した保育所を安全な高台に再建する費用を助成 ●申請団体：（社福）野田村保育会 ●助成金：3億1,900万円

「0～6歳の91人の全園児が奇跡の脱出」と新聞に取り上げられた野田村保育所ですが、建物は跡形もなく津波に流されました。新しい安全な土地への移築は、国の助成が出ないため苦労しましたが、本助成で2012年10月に完成。明るく美しい新施設は、地域の方も復興のシンボルとして歓迎し、多くの方が見学に訪れるほど。2020年度は98人の子どもたちをお預かりし、地域に根差した地域のための保育所として愛され続けています。



南相馬市鹿島厚生病院併設介護老人 保健施設厚寿苑の新設事業（福島県）

第5次

●助成概要：被災により大幅低下した高齢者保健医療、福祉機能の復旧に必要な病院併設の介護老人保健施設の新設費用を助成 ●申請団体：福島県厚生農業協同組合連合会 ●助成金：10億3,000万円

2014年2月に助成を活かし58床から100床に増床しました。職員も少しずつ増員し対応力を高め、利用者数は年間で5,000名以上に。2020年度は3万6,888人と待機者の解消に大きく貢献しています。1階にある地域交流スペースは、夏祭りのイベント会場や地域住民や職員の研修会の場としても活用。現在、コロナ禍で催しは自粛していますが、地域交流スペースのガラス張りを利用したガラス越しによる面会を実施し、喜ばれています。



公立小野町地方総合病院 整備事業（福島県）

第5次

●助成概要：小野町、田村市、平田村、川内村、いわき市を構成市町村とする地域唯一の総合病院が被災し、倒壊の危険性のある旧館の建て替え費用を助成 ●申請団体：公立小野町地方総合病院企業団 ●助成金：20億4,700万円

助成で新築開院してから泌尿器科、形成外科、精神科も開設し全13科に。現在は、透析装置も増台し遠方に通院されていた患者さんの治療も行っています。2020年4月には一般病床60床のうち30床を地域包括ケア病床に移行。高齢者が住み慣れた地元で生活できるように訪問診療や訪問看護などの在宅療養支援も行っています。さらに老人福祉施設、介護サービス事業所との連携も強化し、地域包括ケアシステムの中心的な役割を担っています。



相馬広域こころのケアセンター：なごみの 新設事業（福島県）

第3次

●助成概要：相馬市、新地町、南相馬市の精神医療の拠点となる「相馬広域こころのケアセンター：なごみ」の整備及び運営費用 ●申請団体：（NPO）相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会 ●助成金：3,000万円

現在は「地域活動支援センター」として障がいのある方を対象に創作的活動、生産活社会との交流促進などの機会提供や社会性を養う支援の場に。またフリースペースとして震災によるストレス問題で、社会に適応が困難な方、精神障がい者、引きこもりの方の日中の活動の場として活用しています。今後も利用者の受け入れキャパの拡充や行政・地域のニーズに応えながら、支援活動事業や対応力強化を図っていきます。



あのととき現場は、労働組合は

セールズドライバーが地図にない仮設住宅の情報を書き込んだ、
手作りの地図をもとに配達
〔協力／陸前高田市役所 地図提供／陸前高田営業所〕



震災でなくしたものは多いが、ヤマトらしきは失わない

大船渡支店陸前高田センター(当時)

家族をなくした自分を暖かく迎えてくれた同僚の優しき

――当時の様子を教えてください。

小友 大船渡センターを出てすぐに防災警報とともにものすごい揺れが起きました。揺れが落ち着き細浦漁港に降りて行くと、みなさん慌てて逃げる準備をしている。これはまずい”と高台のセンターに引き返したんです。センターでは若いセールスドライバーと事務の女性が心配そうに待っていました。3人で外に出て国道の向こうの海を見てみると、すーっと水が引いていく。やがて、港の家々がばきばきと音と土煙を上げながら津波に飲まれはじめました。啞然としていると、国道を長女の車が走っていく。「ああ、嫁ぎ先の家族が心配で戻っているんだ。私も陸前高田の自宅の様子を見に行かなければ」とセンターを出ました。山から家に向かっていくと、近所の人たちが血相を変えて上がってくる。水はどんどん迫り、もう自宅に戻ることはできなくなっていたんです。

――「家族は？」

小友 長女も嫁も父母もダメでした。国道で長女を見た姿が、最後になるとは思いもしませんでした。――つらい記憶を思い出させてしまい、申し訳ありません。

どんなに忙しくても「調子はどうね？」の一声を



当時 陸前高田支店 支店長
(現 岩手県央エリアマネージャー)

菅原 利彦さん(写真左)

大船渡営業所 大船渡センター
セールスドライバー

小友 剛史さん(写真右)



小友 いえいえ。私は中学・高校に通う次女・三女が助かったので良かった方です。まわりには家族全員を失った者もいます。その後、遺体を発見できるまで3週間ほどかかり、1カ月後、仕事に復帰しました。

菅原 センターの同僚たちは？

小友 みんなすでに忙しく働いていました。私の顔を見るなり「お前も来ないんじゃないかと心配してたんだぞ」と暖かく迎えてくれて。私にはこんな仲間がいるし、仕事もある。娘たちのためにも頑張らなければ、奮い立つことができました。また、会社や組合からは、行政などよりも早く見舞金やカンパをいただき、本当に助かりました。あのとき、ポケットには8000円しか残っていませんでした。

住所不明でも必ず届けてみせる手作りの地図でひたむきに配達

――菅原さんは？

菅原 私は内陸の北上支店に勤務していましたので、津波の恐ろしさは経験していません。震災から5年後、陸前高田支店に異動したのですが、私が忘れられないのはドライバーたちのひたむきな仕事ぶりです。津波の被害で風景は一変していましたが、以前の住所宛にお中元やお歳暮が送られてきて、そこに

人は住んでいません。それでもドライバーたちは、手作りで真っ黒になるくらい書き込みをした地図をもとに「あそこに住んでいた人はこの仮設に」と、住所がなくても、必死に荷物をお届けしていた…。その姿に感動してしまつて。だから私は、社員に震災のことは一切聞きませんでした。後ろを振り向かず、先を見つめて仕事に取り組めるように支えていこうと、心に決めたんです。また、当時のセンターは、緊急で建設したプレハブのままでしたので、新センター建築の準備も進めました。

――今年4月、港の近くの市街地中心にやっとオープンできましたね。

菅原 それを聞いてホッとしてます。あのころは、本当にこの場所に移動して大丈夫なのかという悩みました。いまも市街地は復興の途中ですが、当時は山から土砂を運び、土地のかさ上げ工事を進めている真っ最中でしたからね。

小友 私は決して褒められるような社員ではありませんが、若い社員に「お年寄りのもとに配達した際は、”調子はどうね？”と一声かけてほしい」と教えています。どんなに忙しくても5分か10分費やすだけで、お客さまが喜んでくれるならそれで良い。それが、どんなときも変わらないヤマトの姿だと思っていま



2021年4月にオープンとなった陸前高田営業所



震災後、海から離れた竹駒地区で営業を続けたプレハブの旧陸前高田営業所



大船渡営業所

ヤマト運輸
労働組合
岩手支部



仲間に気づいてほしいと 制服を着て避難所を巡った

支部執行委員長
高橋 雅人さん

町は消え、そこには
黒く渦巻く水溜まりがあった

車で信号待ちをしていると、急激に揺れ出しました。目の前の電柱が折れるんじゃないか、車両も横倒しになるかもというほどの激しい揺れ。「みんな午後の配達に出ているはずだ、これはまずい」。焦る気持ちを抑えて主管に戻ると、宮古の津波の様子がニュースで流れてきたのです。停電で事務所は機能できず、安否確認もままならないため、とにかくみんなを自宅に帰しました。

眠れぬ夜を過ごした翌日、できる限りの食料などをかき集めて車に積み、ベース長と支店長と3人で、陸前高田に向かうことに。道路には亀裂が走り、まわりにはガレキが並ぶ。交通規制がかかるほど酷い状態なのに、空は青く快晴。それが逆に不安な気持ちをかき立てます。行ける所まで行こうとしたのですが、津波は内陸部の竹駒地区まで来ていました。これ以上は進めないと消防団に制止され、とりあえず近くの高台に上って下を見ると、町はそっくり消えて、黒く渦巻く巨大な水たまりになっていたんです。

「陸前高田については、もしもの事態

を覚悟をしなければならぬかもしれない。いまは自分たちでできることをやっていこう」と帰りの車中で話し合いました。

私の自宅は、主管から40分ほどでしたので、毎日ハイエースに水、食料、毛布を積んで、各地の避難所へ安否確認に走りました。私たちが、ヤマトの車両に乗り制服を着て避難所巡りをしていたのは、避難している社員の方から我々だと気づいてほしかったからです。

原発事故も発生し、夜になると町は真っ暗に。この先どうなるんだと、みんなの気持ちもどんどん暗くなっていきます。毎日、8時と21時に安否の進捗確認の会議を開き、一人また一人と所在が確認できると、みんなの表情にも少しずつ生気が出てきました。最後に残った方の安否確認をできたときは、心底ほっとしました。

なでしこ隊の言葉が 家族を亡くした仲間の救いに

本部からは小野崎副委員長が駆けつけ、いろいろな問題を処理いただき、3月下旬という早さで営業を再開することができました。また、阪神大震災を経験した関西をはじめ各地の女性副委員長たちが結成された「なでしこ隊」に、被災

者のこころのケアを行っていただいたことも大きかったと思います。この震災で3人のパートさんが命を落とし、家族を亡くした社員もたくさん出ました。突然、家族がいなくなった状況を受け止められずにいる方たちに、どんな言葉をかけて良いのか。なでしこ隊のみなさんのサポートなしでは、我々は乗り越えられなかったかもしれません。

私は、この災害で労使一体となったサポートのたのもしさを身にしみて実感しました。そして、被災した組合員の声をいかに対策本部に伝えていくか。現場に立つ我々には、それも大事な役目なのだとよくわかりました。

いまま陸前高田市では、防災意識を明確にした復興への町づくりが継続されています。しかし10年経っても、震災の傷跡は多くの人の心に色濃く残ったままです。実際に一つの町が、津波で消えてしまったわけであり、そこには何千世帯という人が住んでいて、犠牲になったのですから。

住人の大切な思い出がたくさんつまった震災以前の町は、もう戻ってきません。この悲劇を二度と繰り返してはいけません。その強い思いを次の世代に受け継いでいくことも、残された私たちの大切な使命なのではないでしょうか。

「生きていたんだね」避難所には顔見知りの方たちが待っていた

気仙沼支店(当時)

とにかく家族と従業員の
安否確認からはじまりました

――震災時、みなさんは？

小山田 私はセンターにいて黒い水に飲まれそうになりましたが、屋根に這い上がり逃げ延びました。

荒木 私は、お休みをいただいて家にいました。春から娘が幼稚園に入ることになっていたのでお祝いしようとして、一緒に押し寿司を作っていたんです。妻は仕事に出かけていたので、子供と母親を連れて避難所に逃げ込みました。夜になっても妻と連絡がつかない。空は赤く染まり、クラクションや踏切の音が響く中「死んでしまったんだろうか」というような頭で考えていました。そこに、渡辺マネージャーからの電話が鳴ったんです。「生きていたか？」と聞かれ「生きていました」と伝えて。「いまどうしてる？」と問われ「避難することしかできなくて」と答えた瞬間に電話が切れてしまい、まただれとも連絡が取れなくなりました。

尾形 うちも妻は職場に出かけて私が公休で自宅にいました。家には90歳になるおばあちゃんと私の両親、そして1歳の娘がいました。父親は地元消防団に入っていたので、そのままバイクで消防団の仕事に出てしまい、私が車で高台に家族を避難さ



127の避難所に1日3回 届けられるルートを探る

当時 気仙沼支店長
(現 コーポレート部門人事部
東北地域 統括HRマネージャー)

小山田 剛さん(写真左)

当時 気仙沼支店
南町センター センター長
(現 登米営業所所長)

荒木 修造さん(写真右)

せました。もしも私が仕事でいたら、家族は避難できなかったかもしれないと思うとぞっとします。

――お二人とも奥様はご無事で？

尾形 はい、その日のうちにメールがつながり安心しました。自宅は津波に流され基礎しか残っていないのですが、そんなことは問題じゃない。家族みんなの命が助かったことがなによりでした。

荒木 私も安否確認ができたときは、心からホッとしました。会社の様子がわかったのは、5日くらいしてからです。やっと営業所の前の水が引けたので歩いて行くと自動ドアの前に「誰々はこの避難所にいます」とみたいな貼り紙がしてありました。私も「荒木、生きています」と書き残し、家に戻ったんです。

尾形 私は2日後に担当のセンターに行けたのですが、天井近くまで水が来ていたため、中はぐちゃぐちゃ。先にだれかが訪れていたようで、その形跡はありましたが、だれにも会うことはできませんでしたので、私も貼り紙を残しておきました。

小山田 みんな電話がつながらないと、どうにかして営業所に来ようとするんです。そのおかげで、一人ひとりの安否を確認することができました。でも全員確認できるまで、1週間以上はかかりましたよ。

町のために、地域の方のために
宅急便のプロとしてできること

荒木 次第にみんなが会社集まりはじめ、まずは泥をかき出そうと作業をはじめたとき「みんなここにいる場合じゃないだろう。応援がくるから、家に戻って家族のために動いてほしい」と小山田支店長が言ってくれたんです。支店長は、ベースと営業所を往復し、水や食料を運んでくれていました。たまたま私の家が山側にあつたので「救援物資を置かせてくれ。動ける者には、ここに取りに来てもらうから」と、うちが中継基地になりました。受け取りに来る従業員はみんな口々に「家にも落ち着かない。何かできることはないだろうか」と言います。営業所もある程度片付いたようなので、みんなで動ける車の台数を確認すると7台ありました。これなら救援物資の搬送などのお手伝いができるのでは、と話し合っただけです。

尾形 当時、全国から市役所に救援物資がどんどん届いていたんですけど、震災から3日後にはすでにキャパオーバーになっていました。そこで代替の救援物資拠点を、屋根のついている元青果市場の広い敷地に移そうとしていたら、聞いたのです。
荒木 支店長に相談し、まずは状況



気仙沼支店

気仙沼支店の横を流れる川づたいに津波があがってきた



を確認しようと市役所に行き「救援物資の運び方はどうやっているんですか？ 救援物資の本部を拜見させてほしい」とお願いをしました。

尾形 行ってみたら大変なことになっていて。送られてくる物資はそのまま山積み。どこになにかあるかわからない状態で、これじゃダメだと、仕分け作業から手をつけました。

小山田 山のような救援物資の一つひとつに思いが込められているし、それが被災地の人たちの命をつなぐことになる。でも市役所の方たちに、物流のノウハウなどはありません。現場の方たちはもう死にそうな顔をしていて、我々の姿を見ると「なんとかしてこの人たちを」という感じになりました。そこで荒木さんに専属で入ってもらい、タイムリーに情報をやりとりしながら、カスタマイズを進めてもらったのです。

荒木 当時は1・2・7も避難所があり、役所は1日1回の搬送が限界と考えていました。「我々がコース割りすれば、すぐにでも3回に増やせませよ」と話すと驚かれて、ぜひプロに一任したいとなったのです。

小山田 あとは「避難されている方たちのニーズの聞き取りもしましたよ」と、どんどん進めていきました。

尾形 私は避難所生活をしていたので、困っている様子を目の当たりにしていた。だから支店長たちのごとを聞いたとき、居ても立ってもいられず手伝いに走りまわりました。

荒木 避難所の方たちのご自宅を

回っている顔見知りのドライバーさんだとなんでも話しやすい。ドライバーの顔を見て「お互いに生きていたんだね」と泣いてくれる人もいて、生存確認もし合いながらコミュニケーションをとって来ていました。

尾形 私は、水と食べ物配達をしようと思った。私からのプレゼントでもなんでもないので、届けると「本当にありがたい」と心から感謝されるんです。いま思えば、あのとき、私たちが仕事をやっている意味、本来の目的と喜びを身をもって理解できるタイミングでもあったのだなと、改めて感じています。

――行政に協力を申し出たのは、気仙沼が最初でしたね。

小山田 そうです。もちろん町のため、みなさんのために、というのが一番の動機です。ただ私の立場からいうと、パートナーも含めて約80人の社員を守っていかなければならぬ。いまのままだとすぐには通常の宅急便の収入は入りません。どうするんだと悩んでいたとき「行政のお手伝い」という話が出てきたんです。そこで市役所と最初にリミットを決めて「ここから先は、最低限のコストがかかることを請求させてください」と取り決めました。

気仙沼のお客さまと

これからもより近くより深く

――最後にこの10年間を振り返って思うことは？

尾形 一つひとつの荷物に込められ

あのときのワッペンに込められたヤマトの使命

当時 気仙沼支店
気仙沼田中前センター センター長
(現 気仙沼田中前センターグループ長)

尾形 英也さん

ているお客さまの気持ちも一緒に届けること、それが私たちの大事な使命です。その意義をこれからの世代にも伝えていかなければ、と考えています。震災時にもらったワッペンはいまも大事にとってあり、それを時折、取り出して見るたびに、その思いはより強まっていますね。

荒木 私もお客さまとの絆をより強く感じながらこの10年を歩んできました。ちよつと気恥ずかしいのですが、こんなエピソードも。気仙沼には大島という離島があり、そのセンター長は、被災して一週間ほど行方知らずのままでした。ずっとみんなで探し回っていたのですが、偶然、交差点でその姿を見つけて、あつちも気付いて。交差点の真ん中でみんなで抱き合って泣いてしまいました。その姿を見ていたお客さまに「あのとき泣いていたよね」と、10年経ったいまも笑って話しかけられます。そんな会話を気軽にできるようになったことがうれしいですね。

小山田 気仙沼は、社員もそうですけれど、お客さまとても距離が近い町。私は、震災から4年間この地で頑張ってきましたが、異動が決まったときには、みなさんが声をかけてくれました。私にとって一番最初に受け持った店ですから、すべてが忘れられませんし、本当にいろいろなことを学びました。言葉にできない苦労もたくさんありましたが、それがいますごく役に立っています。そう、ここが私の原点です。



支店にいた社員はこの中2階に避難した



ヤマトグループ社員から募集し決定したスローガン「みんなで一歩前へ」

多くの人の心に生き続ける父のようなSDになりたい

石巻支店(当時)

早くご家族のもとへと
願いながら1カ月が過ぎていた

「阿部さんのお父さんは、仕事中に津波に巻き込まれ、お亡くなりになられたと聞きました。」

阿部 私は、あの当時、仙台の専門学校に通いながら消防士を目指していました。でもなかなか就職先が決まらずに、3月11日の卒業式を迎えたのです。あの日の朝、仕事に向かう前に洗濯物を干していた父に「じゃあ行ってくるから」と声をかけたのが、最後になってしまいました。
横山 仙台で被災したんだっただね。
阿部 1週間くらい帰ってくるのができず、その間に母から「父ちゃんが見つからない」と連絡が来て…。新聞で父が働いていた渡波地区は壊滅的な被害を受けていると知り、無事でいてくれとひたすら願いながら戻ってきました。

横山 配達に出ているドライバーの中で、お父さんの阿部正さんだけが営業所に戻ってこなかったのです。正さんは戻る途中で津波に巻き込まれたのではないかとわかりました。労働組合の渡邊支部執行委員長もすぐに来てくださり、手分けして避難所を巡りましたが、どこにもいません。一週間経っても二週間経っても確認ができず、遺体安置所にも確



あんなに細かった阿部君が 10年でたくましく成長

当時 石巻東支店 支店長
(現 コーポレート部門人事部
宮城HRマネージャー)

横山 正直さん

認に行きましたが見つかりませんでした。連絡を待つしかないご家族は本当につらかったと思います。

「先にお話を伺った渡邊さんは「何週間経ってもたった一人の仲間を見つけ出すことができない。遺体安置所に制服を着たご遺体を捜していくのはつらかったが、毎日ご家族に「まだ見つかりません」と報告を入れていた横山さんたちは、もつとつらかっただろう」と話していました。」

横山 営業所の側で正さんが乗っていたトラックを発見できていたので「そこにトラックがあるのになぜ見つからないのか」とご遺族は苦しまれているんです。自衛隊のみなさんは、他の場所から順に捜索されましたので、手つかずの営業所の周りを私たちが捜し回りました。すると、別の女性のご遺体を発見して。急ぎ自衛隊を呼んで報告し事情を説明したのですが「破傷風などの危険があるからやめてくれ」と捜索を止められました。それで「この制服の人間を見つけたら教えてくれ。いつでもだれかがこの営業所にいるから」とお願いしたんです。そして1カ月後、阿部さんが見つかったと連絡が入り、すぐに奥さんと一緒に遺体安置所に向かいました。

「でもこういう場合、なかなか会

わせてくれないですよ。

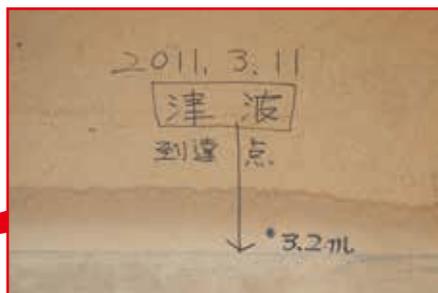
横山 体をきれいに洗ってからだから、今日は無理だと言われました。

それを聞いた渡邊さんが「この制服と同じなんでしょう。身元もPPホルダーが付いているんだからはっきりしている。ご家族はここに来てい

阿部 妹はまだ高校生だったので「ショックが大きすぎるから」と横山さんになだめられて。「君はどうする?」と聞かれましたので「私は行きます」と答えました。
横山 そのときの気丈な阿部君の姿は、記憶に残っていますよ。
阿部 こうしてみなさんのおかげで、やっと父と再会できました。

父の意志を継いでヤマトへ 働いてわかった父の大きさ

横山 次に阿部君に会うことができたのは、品川プリンスで行われた勤続20年の表彰式にご家族を招待したときでした。正さんは、勤続20年の表彰で、無事故表彰の金賞を受賞されることがすでに決まっています。社長のご厚意で「ご家族にぜひ出席いただこう」となり、私は付



津波が1階の天井を越えた石巻東支店。今も当時のメモが壁に残る



取材に協力していただいた気仙沼・石巻地区のみなさん

き添いで一緒にしたんです。

阿部 父の遺影を持って、家族みんなで出席させていただきました。

――そのとき渡邊さんが「お父さんの意志を継いで、一緒に働いてみないかと」と声をかけたんですね。

阿部 式典に出て感動していたこともあり「自分もやりたいです！」と即決で答えました。

横山 当時の阿部君は、線が細くてひよろひよろ。それで「荷物の持ち運びは思ったより大変だよ、それでもやってみるかい？」と心配しても一度聞くと「やってみます！」と力強く答えてくれて、私は本当にうれしかったです。そのやり取りを見ていた気の早い田原支社長が「じゃあ、すぐに正社員で採用しよう」と（笑）。でも特別扱いで甘やかしては、お父さんも喜ばれない。「他と同じようにまずはパートからはじめ、2年間、彼の頑張りを見てから正社員にしましょう」とみんなで話し合っただけなんです。

――阿部さんは、その期待にしっかりと応えたわけですね。
阿部 最初は右も左もまったくわからず無我夢中でした。荷物が多いとすぐにテンパったり、地図を見ても自分がどこに向かっているのかわからなくなってしまうたり、いろいろとご迷惑をおかけしました。――正直、辞めたいと思ったことは？

阿部 ありました（笑）。でもまわりのみなさんに、優しく、厳しく教

えてもらいながら、少しずつ成長することができて、いまがあります。

横山 お父さんのこともいろいろと話してくれたでしょう。

阿部 「お父さんは、こういう人だったんだよ」と言われると、とても新鮮でした。父は、無口な人だから家で仕事の話をしないし、愚痴もほとんどこぼしません。でも実際に自分が父と同じ仕事に就いて「父はこんなに大変な仕事を20年も続けて来たんだ。それを嫌な顔ひとつ見せずにやっていたんだ」とわかったんです。改めて父を尊敬し、自分はまだまだだなと感じました。

横山 まわりのみんなは、ずっと阿部君を自分の息子のように見つめ、応援してきました。それをプレッシャーに感じてしまうこともあったかもしれないですね。でも阿部君は、ずいぶんたくましくなりました。
阿部 7月、12月の繁忙期で鍛えられましたからね。それでも4回目の繁忙期を乗り越えたくらいで、やっとみなさんに付いていけるようになったんじゃないかと思っています。

**いつ父に見られても
恥ずかしくない働きをしたい**

――阿部さんのこれからの目標は？
阿部 荷物をお届けしたお客さまに「ありがとう」と言われると、この仕事を選んで本当に良かったと思うんです。感謝されるのは素直に気持ちいいですし、父もきっとそんな喜びを感じながら忙しいときも頑

ずっと父が助手席で見守ってくれている

石巻蛇田センター
セールスドライバー
阿部 郁也さん



張っていたんだろうなと、想像してきます。また、お客さまの中にも父のことを覚えてくれていてる方がいらっしやって「あのとき、お父さんはね」と、父の働きぶりなどを教えてくれるんです。そんな話を聞くと、胸にグツとくるものがあります。10年経っても、20年経っても、いつまでも父は私の目標ですね。

横山 阿部君が入社したのが19歳だったから、もうすぐ30歳。段々とお父さんに風貌が似てきて、ふとした仕草にお父さんを思い出すことがあります。10年経つと正さんが亡くなられた44歳に近くなりますし、親子で金賞受賞も夢ではないですね。でもその前に結婚かな（笑）。

――じつはみなさんに内緒で彼女とかいらっしやるのでは？
阿部 いないですよ（笑）。

横山 自称父親代わりの目がたくさん光っているし、お母さんからも情報が筒抜けだから隠せない（笑）。でもみんな「正さんがいつも阿部君のことを見守ってくれているから安心だよ」と話しています。

阿部 みなさんには「大きな事故もなく働けているのは、父がトラックの運転席の横に座って守ってくれているからだよ」と言われます。私は、靈感とかはないですから父の姿は見えますけど、そうであつたらとてもうれしいですね。これからも、いつ父に見られても恥ずかしくない、ヤマトの社員らしい働き方をずっと続けていきたいと思っています。



2階の屋根の上に避難できるように、震災後、出口のみを屋根に増築した石巻東支店



「父に見られて恥ずかしくない社員に」と阿部さん

ヤマト運輸
労働組合
宮城支部



労使が組合も会社も関係なく 一本になって助けてくれた

支部執行委員長
渡邊 幸夫さん

なにより安否確認が優先
そこだけはブレなかった

震災が起きた日は、マネージチャレンジ制度の面接のため、当時の人事課長 鹿野さん、副島主管支店長と一緒に車で各支店を回っていました。仙台西支店に着き、面接をしようとしたときにグラグラツときて「この揺れはちょっとやばいんじゃないか」と。そこから宮城主管にまで普通なら30分くらいで着くはずが、道路が途中で寸断されていたため4時間近くもかかって戻りました。

支店の中はとても機能できる状態ではありません。外に避難していた仲間と急いで各エリア支店長たちに電話を入れたのですが、一向に通じない。副島主管支店長の携帯電話だけが緊急災害などに対応できる仕様で、なんとか繋がりはじめました。当時は主管が一つだったので、雄勝、女川、志津川、石巻、石巻東、蛇田、松島、塩釜、多賀城、名取の閑上、あとは亘理と全部に連絡し、安否確認を取っていったんです。

そんな矢先、車載テレビに気仙沼や仙台空港の津波の様子がニュースで飛び込んできて「これはただごとではない」とわ

かりました。幸い仙台空港近くの岩沼臨空支店の従業員は、支店の屋上に避難して無事でいてくれました。

とにかく少し落ち着こうと、宮城主管の4階会議室を片付けて対策本部にしましたが、だれもがなから手をつけて良いのかわからない。それでも「とにかく社員の安否確認が優先だ！」と、そこだけは絶対にブレませんでした。書記長の村上さんは、南三陸方面の状況をキャラバンで見に行ってくれて、他にもバイクを借りた者が周辺を走り回るなど、手分けして現状を把握していきました。

全国に組織を持つヤマトの
底力をたのもしく感じた

営業再開に関しては「お客さまはこれ以上待ってくれない、少しでも早く再開できないか」と連絡がきましたが、田原支社長と副島主管支店長が「再開はまだです」と現場に寄り添って頑張ってくれていました。お二人に会社との交渉や準備に専念していただき、鹿野さんと人事の小原さんと私が安否確認役となり、不明者を捜し続けたんです。あのときは、労使が組合も会社も関係なく一本になり、窓口として支社の人たちも全部まとめ上

げ、それぞれグループを作って安否確認のため現地を駆け回りました。そのおかげで3日間で約60%、1週間でほぼ全員の安否確認ができたのです。でも阿部正さんだけは見つからず、1カ月後に家族との悲しい再会となりました。

営業再開は2週間後ぐらいです。会社との対応には、中央本部から駆けつけてくれた川上副委員長も間に入ってくれましたし、車のガソリンがなく困っていたときは、社員が知り合いに連絡を取り、融通もしてくれました。各支店やセンターも大変な状況の中、各自清掃作業を進めるなど、まさにみんなが自分たちにやることを役割分担することで、営業再開を果たすことができたのです。

あの苦境を乗り越えることができたのは、まさに全員が一丸となれたからです。全国の組合、支社など、多くの方が入れ替わり立ち替わりでサポートに来ていただけたおかげだと思っています。全国から届いたカンパも本当に助かりました。私はあのときほど「全国に組織を持つ組合の力ですごいんだ」と感謝したことはありません。その後の被災地への支援を自主的に、自然な流れとしてはじめたのも、ヤマトだからこそだと、私はいまでも誇りにしています。

ヤマト運輸
労働組合
新宮城支部



当時 宮城支部書記長
(現 支部執行委員長)

村上 誠さん

会社も組合も
動いてくれている
それがなにより心強かった



届いたカンパ、見舞金は
宮城県だけで3億円以上に

あのときは、本当になから手をつけて良いのかわからない状況でした。沿岸地域の社員の方へ連絡を取りたいのですが、全然繋がらなく、なかなか各地の状況がつかめません。

震災から2日後に、志津川に行っていたドライバーさんが主管支店に戻ってきた。「志津川もすごいことになっている」と報告してくれました。当時の副島主管支店長、渡邊委員長から志津川町の状況を見に行ってくれと話があり、書記長だった私は「気仙沼出身で石巻や志津川にもいた経験があるから、道路もわかっていまして」と、そのドライバーさんと一緒に、現地に行ってみることにしたのです。

水のペットボトルを10箱くらい、塩おむすびも30個くらいキャラバンに載せて志津川へ。なんとかたどりと着くとベイサイドアリーナに避難した人が大勢いた光景をいまでも思い出します。そこで「富山主管から大型10台くらいで水を運んで来ると連絡が入った」と聞き、「こんなに早く会社は我々のために動いてくれているんだ」と心からほっとしたのを覚えています。

その後は、全国から支援物資やカン

パ、いろいろな方が応援に駆けつけてくれました。カンパ金は、1年近くずっと送られてきて、会社からの見舞金も合わせると宮城県だけで3億円は超えたと思います。これを間違いなくみなさんにお渡しするのは大変な仕事です。そこで、本部から柳瀬常任が来て、計算など段取りを教えてください、助かったのを覚えていいます。また、全国の女性副委員長の方々と支店などに行ってきたとき、組合員に見舞金や支援物資と一緒に手渡してくれたんです。そのときには、女性の視点でうまく現場の悩みや要望も汲み取ってもらい、とても助かりました。

みなさんの手厚い応援があつてこそ、いまがある

避難所を巡って話を聞くと「お風呂に入りたいたい」という声がたくさん。泥だらけで避難していた人もいましたし、最初のころは、自衛隊などのお風呂もまだありませんでしたからね。なんとかならないだろうかと渡邊委員長、副島主管支店長に相談すると、東北支社の仮眠室にお風呂があり、地下水を組み上げている

し、プロパンガスだからお湯も湧かせるところのこと。そこで、リースした車輛を使用し社員が避難している場所を回り組合員とご家族を乗せて、東北支社に連れて行きお風呂に入っていたことにしました。

往きの車中では、静かで口も開かなかった子どもたちでしたが、お風呂に入ると、少しリラックスできたのでしょうか。避難所へ戻るときには、笑顔で楽しくおしゃべりができ、少しでも役に立てて良かったと思います。

営業再開のためにと、本社から福田部長が、組合からは現在の小野崎副委員長、森下委員長が駆けつけてくださり、川上副委員長に常駐していただき、営業再開にあたるすべての窓口を担当してもらえたのです。川上さんは、阪神大震災で現地の組合担当として現場を指揮された経験をお持ちでした。こういった状況で、現場はどう対応すべきか。そのときの経験を活かし、テキパキと指示をされる姿は、とてもたのしかったですよ。そんな手厚い支援をいただけたのも、全国に組織を持つヤマトだからこそ。そして組合と会社が一つになり、労使主体で進めていくことで、未曾有の危機も乗り越えることができたのだと、いまもずっと感謝し続けています。

原発事故で故郷を離れた我々を支えてくれたのは全国の仲間だった

双葉支店富岡センター(当時)

福島原発事故で故郷を離れ
遠くへ、もっと遠くへと避難

「猪狩さんが勤務されていたセンターは、福島原発の近くでしたね。猪狩 富岡センターは原発から5km圏内です。震災が発生したとき、私は原発から10km、海岸から1kmくらいの場所を配達中でした。ものすごい大きな揺れで、これはおかしいとトラックのラジオをついたら大津波警報が流れてきたので、急いで高台に車両を移動したんです。でもドライバの性で「集荷の時間になったから、もう行かなくちゃ」とお店をまわりはじめました。2軒目に行ったコンビニは中がぐしゃぐしゃ。「ヤマトさんも集荷している場合じゃないよ!」と言われ「自分も逃げなくちゃいけないんだ」と我に返り、急いで海岸から離れた場所に移動しました。そこに佐藤哲也支店長から「配達、集配をやめて、営業所に戻れ!」とメールで指示が届いたんです。

岡本 私は当時、郡山主管支店の人事にいました。富岡センターは海岸から2、3kmしか離れていないのですが、かなり高台にあり、津波という点では問題ありませんでしたね。

猪狩 自分の担当エリアから営業所まで15分くらいなのに、40分くらいかかったでしょうか。道路が陥没



みんなに恩返しするため 所長に立候補しました

当時 双葉支店富岡センター
セールスドライバー
(現 いわき小名浜営業所 所長)

猪狩 和憲さん

していましたが、海岸を通らないように遠回りをしながら戻った記憶があります。全員が津波をやり過ぎることができましたが、センターは事務所の中に入れないほど酷い状態でした。佐藤支店長から「みんな自分の家に、家族の元に帰った方が良い」と言っていただけで、私は家族とともに避難所に向かったんです。

岡本 そして翌朝「原発が危険な状態にある、全員町内から避難しなさい」と行政から指示が出ました。

猪狩 家に戻る時間もなくて私はヤマトの制服のまま。荷物も持てずまさに着の身着のまま。最初は川内村に避難しました。ところがそこで

「原発が爆発した」というニュースが報道されたんです。「これはやばい。もっと遠くに逃げないと危険だ」と郡山に移りました。そんな状況を聞きつけた埼玉の親戚が、うちにおいでと連絡をくれて、家族みんなですっかりいになることにしたんです。

地図にピン刺して全社員の避難先を確認し異動先を斡旋

猪狩 震災の半年前くらいに家を建てたばかりだったので、住宅ローンはそのまま残っていました。これからどうしたものかと悩んでいたとき、佐藤支店長から「福島に戻って働かないか?」と連絡をもらえたん

です。早速、家族みんなで郡山に戻りました。そこでお世話になったのが、岡本さんです。

岡本 郡山主管の異動先手配は、私の担当でしたからね。震災が起きて一週間は、県内2234名の社員の安否確認を懸命に行いました。安否システムはありませんから、電話に頼るしかないのに、携帯電話が使用できなくなっている。それでも現場の支店長や副支店長、他にもいろいろな方の協力があって、全員の情報を集めることができました。

「原発事故が安否確認などをより難しくしていたのでは?」

岡本 はい、地震と津波だけではなく、原発の問題があったのでややくしくなっていました。そこで福島県

の大きな地図を作ったんです。原発の位置を押し、社員が住んでいたところを全部ピンで刺して一人ひとり

状況を確認していきました。たとえば「猪狩さんは、震災翌日に川内村

に向かったと連絡が入っていたから、自宅にはいない。1週間経ったいまはどこにいるのか、確認を取ろう」と全員の状況を目に見えるようにして、情報を共有したんです。

「その上で、全国各地に避難した社員の異動先の手配を進められたわけですね。」

岡本 一人ひとりが持つ資格や勤

わけて、情報共有したんです。

「その上で、全国各地に避難した社員の異動先の手配を進められたわけですね。」



いわき小名浜営業所のメンバーと



いわき小名浜営業所

務年数、希望勤務地などを確認し、異動先を決めていったのです。上司を通して確認を取ってもらった

り、直接会いに行ったり、毎日、各支店の人事担当者と連絡を取り、連携・手分けをしてなんとか進めてい

きました。異動先の幹旋がスムーズに行えたのは、福島県内だけでなく

宮城などの近県、さらに九州と、全国の人事課のみなさんに快く協力

をいただけたからです。勤務先が決まったら、当然、住む場所をなんと

かしなければなりません。会津に一つ、郡山に一つと郡ごとで温泉旅館

などを借り上げ、とりあえず生活できる場所を手配していきま

した。私は、大熊にある自宅にはまだ戻ることができなかった

ので、10畳くらいの大部屋を用意していただき、家族4人で1カ月間ほど暮らす

ことになりました。――郡山主管の対象となった方は、何人ぐらいたいたのですか？

岡本 富岡は40人くらい。他にも相馬からはじまっていわきまで6セン

ターで120人くらいです。**猪狩** おかげさまで県外に避難して

いた富岡センターの同僚の大半が戻って来ました。私が仕事を再開で

きたのは、震災から約1カ月後。異動先は郡山喜久田センターで、富岡

からは一人だけでした。勤務地はバラバラになりましたが「もう一度、

故郷の福島で、ヤマトの社員として働ける」という希望を叶えていた

けただけです。

異動した先々で学んだことをみんなのために役立てたい

――富岡のころとは、いろいろと勝手も違っていたでしょうね。

猪狩 富岡のお客さまは、会社というより農家や一般の方が中心で

した。郡山喜久田センターでの私の担当は、工業団地で比較的会社の荷

物が多く、以前は1日に大体100個くらいだったのが、郡山に入って

200個、300個と増えました。富岡センターとは地域性もお客さ

まも違うため、最初はいろいろと戸惑いましたが、センターのみなさん

はとても良くしてくれて、ストレスなく働くことができましたよ。

岡本 猪狩さんは、3年後、いわきに異動の願いを出されましたよね。

猪狩 大熊の自宅のローンもありましたから、もっと頑張らなければな

かったのですか？**猪狩** 原資の補償みたいなものはあつ

ても優遇はなかったですね。いわき谷川瀬センターではまず1年間ドラ

イバーとして働いて、2年目に支店長から「センター長をやらな

いか」とお声がけいただいたんです。その後、センター長として約4年間頑

張り、大熊の自宅のローンを完済しました。それでいわきで新しく家を建て

たんです。もちろんローンで(笑)。**猪狩** 出身は大熊ですか？

――出身は大熊ですか？**猪狩** 大熊の隣町です。故郷には愛

着があり、最初はいつか戻るんだと

散り散りになった社員に新しい異動先と住む場所を

当時 郡山主管支店 人事課長
(コーポレート部門人事部
福島HRマネージャー)

岡本 宏章さん



考えていましたが、5年も過ぎると「もう戻ることはいらないだろうな」と。戻っても子どもも学校のこともあるし「違う土地で新たにスタートしなくちゃいけないんだ」と考えを変えて家を建てたんです。

岡本 その後、猪狩さんは、役職に立候補し、旧双葉エリアの広野センターに異動されたんですよ。

猪狩 私は震災後、いろいろなセンターを点々としてきました。そこで多くの人と出会い、自分に足りな

かったことをたくさん教えていただいたんです。そして、センターごとで

り方や仕組みが全部違うということも知ることができました。こうして

吸収したものを、周りの社員に提供できればより良くしていけるし、み

なさんへの恩返しにもなるのではと思ひ、役職候補に手を挙げたのです。

――現在も猪狩さんは、富岡センターや郡山喜久田センターなどのみなさんと交流があるのですか？

猪狩 組合が主体となり、毎年3月ぐらいに、旧双葉エリアの同窓会

を開いていただいているんです。1年ごとに懐かしい仲間たちと顔を合

わせ「いまどうしてるの?」「今後どうするの?」とか近況を報告し合っ

ています。お互いに苦しいことや大変なこともありすが「負けるな。

頑張ればどうにかなる」「また来年も一緒に会おう」と毎回盛り上がり

ているんですよ。**岡本** 今年はコロナの関係で断念

しましたが、いままで9回は開催して



人事が中心になり作成した131Pにおよぶ克明な記録

くれましたね。私自身も、震災で人とのつながりの大切さを身に染みて

感じています。安否確認に避難所を巡回していたとき、仲間と偶然再会

できたときは、人目を気にせず抱き合って泣いてしまいました。当時の

主管支店長が「会社から主管を郡山から会津にと言われた。でもみんなはここに残っている。どうしたら

いいんだ」と悩み、悔し涙を流されていた姿も忘れられません。こうして仲間への思い、絆の強さが、ヤマト

という会社の底力になっているんだと信じています。

猪狩 社員だけでなく、お客さまとのつながりも強く深いですよね。いわき市には、大熊や富岡から避難さ

れてきたお客さまもたくさんいました。配達先で再会すると「元気にしているんだね」と声をかけていただ

いて。一番苦しいときに、お客さまに元気づけていただけたんです。こ

のとき、ヤマトの社員として働いてきて本当に良かったと心底から思

いました。現在は、小名浜営業所の所長の任に就いていますので、こうし

て人との関わりで学んできたことすべてを、みんなに伝え共有してい

きたいと考えています。

ヤマト運輸
労働組合
福島支部



家族や子どもたちが 喜んでくれる心のケアも大切

支部執行委員長
佐久間 勉さん

原発事故という未知の状況で
自分にできることを模索した

福島主管で地震に遭いましたが、この世の終わりかと思うほどのすごい揺れ。急ぎパートさんを自宅に帰し、私もいわきの自宅に車で向かいましたが、進行の道路はガラガラなのに、反対車線は避難する人たちで大渋滞。い思えば、私は海から原発の方向に向かっていたのでね。翌日、原発が水素爆発を起こし「着ていた服は燃やした方が良く、窓は開けてはいけない」などの噂が飛び交い、町は人っ子一人いないゴーストタウンになりました。私は支部の委員長に就任してまだ1年半ほどですし、もちろん放射能の知識はありません。「でも小さな子どもがいる方はもっと大変なはず。責任者として組合員をケアしなければ、自分ができることをやっていかなければ！」と腹をくくったんです。

しかし、会社からの救援物資や全国の組合にいただいたカンパを配りたくても、原発事故の避難でだれがどこにいるのかなか把握できません。県外に出してしまった人もたくさんいましたので、とにかく縦と横の連絡網をフルに使い、一

人ひとりの安否を確認しながら配って回ったんです。あのときは、みんな避難するだけで精一杯でしたから、食料、衣類、充電器、そして現金を手渡すと、本当に喜んでくれました。

そこで痛感したのは、物資だけでなく心のケアの大切さ。これからは組合員だけでなく家族も参加でき、つながりを強めるイベントも必要だと考えたのです。そのきっかけは2011年の夏、放射線の影響でプールで泳げない組合員の子どもたちを、会津のプールに招待したことでした。大喜びでプールにワーツと駆け込む子どもたちの姿を見て「ずっと我慢してたんだな、やって良かった」とつくづく思いました。昨年はコロナ禍で中止しましたが、それからは毎年、金魚すくいや輪投げなどの出店からバーベキューやスキー大会まで、夏と冬に200〜250人規模の家族で楽しめる手作りの企画を支部で開催し続けています。ある年、家庭の事情で退職するか悩んでいたパートさんに「イベントに出たいから辞めないで、子どもにも言われています」と相談されたときは、うれしかったですよ。

だれもが住んでいる土地に愛着がありますし、大切な人との付き合いもある。でも避難指示が長引き、自分の意識にか

かわらずやむなく引越すことになった者もいます。そんな全国に散り散りになった仲間たちとは、3月11日近くの土曜日になると、毎年、同窓会を開いて集まり、旧交を温め合っているんですよ。



震災後から毎年、夏と冬に散り散りになった仲間と同窓会を続けている福島支部

ヤマト福祉財団「東日本大震災 生活・産業基盤 復興再生募金」事業の概要

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、被災地の人々から生活や産業を支える大切な基盤を根こそぎ奪い去りました。特に水産業や農業の被害は深刻であり、震災発生後から、一刻も速い官民一体となった復興の支援が求められました。

宅急便事業により、被災地のみなさまや産業と関わりの深いヤマトグループは、地域の生活基盤の復興と水産業・農業の再生のための継続支援として、宅急便1個につき10円の寄付を1年間継続することを、震災発生翌月の4月7日に発表しました。

時を同じくして、内閣府公益認定等委員会の池田守男委員長より「被災地への早期復興支援が求められているいまこそ、公益法人が中心になってサポートを」と各公益法人に呼びかけが届きました。

4月1日より「公益財団法人ヤマト福祉財団」として活動を開始していた当財団は、この呼びかけに真っ先に呼応、4月11日に「障がい者支援事業」に加え、被災地の復興支援事業を追

加する変更」を申請、内閣府より認定を受けました。さらに6月24日に、財務大臣より寄付者が非課税で寄付できる「指定寄附金」の指定を受け、

7月1日、当財団は「東日本大震災生活・産業基盤復興再生募金」をスタートさせ、ヤマトグループはこの募金に非課税で、全額寄付できることになりました。そして個人の方々や法人、団体からも広く寄付金を募っていくこととなりました。

当財団では、寄付金の使途の妥当性や客観性を確保するため、6月24日に第三者による「復興支援選考委員会」を発足させました。選考にあたっては「見える支援・速い支援・効果の高い支援」を基本方針に、国の補助のつきにくい事業への助成や単なる資金提供でなく、新しい復興モデルを育てるために役立てるなど、より民間らしい助成を心がけました。

8月24日に第1回の復興支援選考委員会を開催、総額41億円規模の第1次助成先を決定致しました。10月11日には総額34億円規模の第2次助

成先を決定、12月12日には総額22億円規模の第3次助成先を決定、

2012年2月22日に総額21億円規模の第4次助成先を決定、4月17日には総額36億円規模の第5次助成先を決定致しました。こうして第1次から第5次助成先は事業数31件、助成総額は142億6600万円となりました。

2012年6月30日をもって募金の募集、助成事業の募集は終了し、寄付総額は1年間で142億8448万751円となりました。

2017年3月の松川浦防災林の植樹を持って、31件の助成事業はすべて完了いたしました。松川浦に植えられた小さな苗木が、りっぱなクロマツへと成長するまでに、さまざまな人と時間を要するように、被災地が完全に復興を遂げるには、多くの課題も残されています。被災者の思いと、それを支援する気持ち。それを風化させることなく、未来へとつないでいけるように、ヤマト福祉財団は見守り続けます。

※公益法人とは

「公益法人」は、広く社会に役立つために、宗教や慈善、学術、技芸などの公益を行う法人のことで、100年以上の歴史を持っている。2008年には、民間による非利益の活動を活発にし、民による公益を増進するとともに官庁ごとの法人の設立・運営のばらつきを解決することを目的とした「新公益法人制度」がスタートした。ヤマト福祉財団は、2011年3月に内閣府より認定を受け、4月1日から公益財団法人として活動をはじめている。

「東日本大震災復興支援選考委員会」委員（所属・役職は当時）

委員長

内田 和成：早稲田大学大学院商学研究科教授／早稲田大学ビジネススクール教授

委員（五十音順）

家田 仁：東京大学社会基盤学教授／土木学会副会長（震災担当）

小泉 武夫：東京農業大学名誉教授／農学博士

野田由美子：プライスウォーターハウスクーパース株式会社／パートナーPPP・インフラ政府部門アジア太平洋地区代表

林 春男：京都大学防災研究所巨大災害研究センター教授

年表

ヤマトグループ

寄付金の推移

2011年

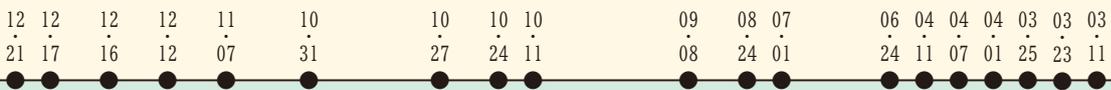
東日本大震災発生(14時46分)

「救援物資輸送協力隊」編成(車両200台/人員500名)
東北全エリアで「宅急便」集配を再開

「宅急便1個につき10円の寄付」(年間130億円規模)を発表
「宅急便ひとつに、希望をひとつつけて」新聞広告

10月までの宅急便個数、寄付総額発表
宅急便個数累計7億9,323万8,047個
寄付総額79億4,104万3,082円

11月までの宅急便個数、寄付総額発表
宅急便個数累計9億1,425万7,597個
寄付総額91億5,397万7,779円



公益財団法人ヤマト福祉財団

東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金事業

内閣府より認定を受け、公益財団法人として設立登記

「東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金」が財務省より「指定寄附金」の指定を受ける

同日、第三者による「復興支援選考委員会」発足

委員長/内田和成(早大教授) 委員/家田仁(東大教授)、小泉武夫(東農大名誉教授)、野田由美子(PWCアジア地区代表)、林春男(京大教授)

「東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金」募金・助成先募集開始

「東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金」募金・助成先募集開始

「見える支援、速い支援、効果の高い支援」を基本方針に、第1次助成先を決定

第1次助成先発表表(41億円規模)

宮城県「海底清掃資材購入支援事業」、「高鮮度水産物供給施設整備事業」、「養殖用資機材等緊急整備事業」、岩手県「水産加工事業者水産回復支援事業」、「魚価安定緊急対策事業」、特定非営利活動法人よつぐらぶ「よつぐらぶ地域振興施設「交流館」復興事業」、財団法人ふくしま海洋科学館「アクアマリン福島・熱源設備改修事業」、すかがわ岩瀬協同組合「農業生産再生事業」、南三陸町「水産業基盤施設緊急復興事業」等、計9件/総額40億8,300万円↓40億6,500万円

第2回東日本大震災復興支援選考委員会開催 第2次助成先決定

宮城県南三陸町志津川の「仮設魚市場」が10.21に完成し、初競り、オープニングセレモニー

(第1次助成3.7億円の一部)

第2次助成先発表表(34億円規模)

岩手県「水産業共同利用施設復旧支援事業」、「製氷・貯氷施設回復支援事業」、釜石市漁業協同組合連合会「魚市場経営基盤再生事業」、社会福祉法人野田村保育会「野田村保育所再建事業」、宮城県「農業生産復旧緊急対策事業」、福島県相馬市「相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業」、計6件/総額8,800万円↓22億700万円 33億

岩手県水産加工事業者生産回復事業の助成先を決定

(第1次助成の内 10.7事業者・16億円規模)

10月末までの募金総額(ヤマトグループからの寄付を含む)79億4,014万3,082円

第2次助成までの助成総額74億7,100万円

第3回東日本大震災復興支援選考委員会開催 第3次助成先決定

福島県「アクアマリンふくしま熱源装置」運用開始式(第1次助成)

福島県 応急荷役設備整備により「相馬港内航フイダーコンテナ航路」再開(第2次助成)

第3次助成先発表表(96億円規模)

岩手県「製氷・貯氷施設回復支援事業」、「水産業共同利用施設復旧支援事業」、「陸前高田市竹駒保育園の新設・再建事業」、福島県川内村「川内高原農産物栽培工場建設事業」、特定非営利活動法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会「相双広域こころのケアセンター：なごみの新設事業」、計5件/総額22億200万円

第3次助成までの助成総額96億7,300万円↓84億7,400万円



12月までの宅急便個数、寄付総額発表表
宅急便個数累計11億7,877万6,576個
寄付総額 110億9,321万4,299円

01・17

福島県「道の駅よつくら港地域振興施設交流館」地鎮祭(第1次助成)
国庫3次補正予算により第2次助成
第3次助成の一部助成先の補助により助成額減額11億9,900万円

01・28

福島県「相馬港海上コンテナ物流基盤整備事業」相馬港機能復旧記念式(第2次助成)
福島県すかがわ岩瀬農業協同組合(現・JA夢みなみ)「低温農業倉庫」新築工事起工式(第1次助成)

01・30

1月までの宅急便個数、寄付総額発表表
宅急便個数累計12億6,800万3,208個
寄付総額 120億8,355万9,589円

02・07

宮城県 村井嘉浩知事よりヤマト福祉財団、ヤマトホールディングス(株)に感謝状贈呈
岩手県 大船渡市漁業協同組合「製氷・貯氷施設保管施設」地鎮祭
宮城県 海底清掃資材購入支援事業の助成先が決定、県内4つの漁業協同組合に海底瓦礫類回収装置購入のため約1億円(第1次助成)

02・10

岩手県 上野善晴副知事よりヤマト福祉財団、ヤマトホールディングス(株)に感謝状贈呈
岩手県 水産業共同利用施設復旧支援事業の助成先が決定、
県内11の水産業関係団体に総額8億7,900万円(第3次助成)

02・17

第4回東日本大震災復興支援選考委員会開催 第4次助成先決定

02・21

岩手県「水産業共同利用施設復旧支援事業」、宮城県漁業協同組合「七ヶ浜町水産振興センター建設事業」、福島県相馬市「農地復旧復興(純国産大豆)プロジェクト」、福島県東西しらかわ農業協同組合「地域農業再生基幹施設緊急整備事業」、計4件/総額21億6,000万円

02・22

第4次助成先発表表(21億円規模)
宮城県 養殖用資機材等緊急整備事業の交付先が決定、県内2漁業協同組合、24漁業者で構成するグループに4億2,000万円(第1次助成)

02・29

宮城県 ガレキ撤去専用底引き網を使用した金華山沖合での大規模な海底ガレキ撤去作業を開始(第1次助成)

2月までの宅急便個数、寄付総額発表表
宅急便個数累計13億8,767万9,264個
寄付総額 131億7,044万4,541円

03・07

宮城県 農業生産復旧緊急対策事業の交付先が決定、県内の農協・農業法人・農業者組織等89の事業団体に13億2,000万円助成(第2次助成)

03・13

岩手県 久慈市漁業協同組合「製氷・貯氷施設災害復興新築工事」安全祈願祭・起工式(第3次助成)

03・18

岩手県野田村「野田村保育所」新築工事地鎮祭(第2次助成)

03・22

第5回東日本大震災復興支援選考委員会を開催 第5次助成先決定

03・24

岩手県 釜石市漁業協同組合連合会「水供給装置・衛生管理施設」竣工式(第2次助成)

03・26

福島県 佐藤雄平知事よりヤマト福祉財団に感謝状贈呈

04・11

第5次助成先発表表(36億円規模)
宮城県「海底清掃資材購入支援事業」、気仙沼水産加工業協同組合「仮設水産加工場施設設備整備事業」、三陸漁業生産組合「いわて三陸」夢あふれる漁業モデル創生プロジェクト、福島県公立小野町地方総合病院企業団「公立小野町地方総合病院整備事業」、福島県厚生農業協同組合連合会「南相馬市鹿島厚生病院併設介護老人保健施設厚寿苑の新設事業」、福島県楢葉町「仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業」、緑地創造研究会「福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業」等、計7件/総額 36億8,600万円 第五次までの助成総額 142億6,600万円

04・17

3月までの宅急便個数、寄付総額発表表
宅急便個数累計14億2,360万8,136個
寄付総額 142億7,117万7,426円

04・23

岩手県 釜石市漁業協同組合連合会「水供給装置・衛生管理施設」竣工式(第2次助成)

04・24

福島県 佐藤雄平知事よりヤマト福祉財団に感謝状贈呈

04・26

第5次助成先発表表(36億円規模)
宮城県「海底清掃資材購入支援事業」、気仙沼水産加工業協同組合「仮設水産加工場施設設備整備事業」、三陸漁業生産組合「いわて三陸」夢あふれる漁業モデル創生プロジェクト、福島県公立小野町地方総合病院企業団「公立小野町地方総合病院整備事業」、福島県厚生農業協同組合連合会「南相馬市鹿島厚生病院併設介護老人保健施設厚寿苑の新設事業」、福島県楢葉町「仮設校舎敷地造成工事、仮設校舎設置事業」、緑地創造研究会「福島県立自然公園松川浦周辺の海岸防災林再生事業」等、計7件/総額 36億8,600万円 第五次までの助成総額 142億6,600万円



ご協力いただきましたみなさまに感謝の思いを込めて

東日本大震災という未曾有の災害がもたらした悲劇は、我々の想像を遥かに超えていました。しかし、そこから立ち上がり、前へと進む被災地のみなさんの姿は、それ以上に、私たちの想像を超える力強さを感じさせてくれます。

取材をするにあたり、当時のYHD経営戦略部岡村部長にアドバイスをいただき、東日本大震災 生活・産業基盤復興再生募金で助成いたしました東北三県のみなさまと、あのととき現地で復旧・復興に取り組んできたヤマトグループの社員や労働組合のみなさまにご協力をいただきました。誠にありがとうございました。

当時を振り返ることは、思い出したくない辛い出来事に触れることでもあったかもしれませんが、それでもご協力いただいたみなさまの思いを、受けとめ、取材を続けさせていただきました。

街並みも少しずつ変化がありました。南三陸町は全体がかさ上げされ、新しい商店街と道の駅に人々が集まっています。嬉しいニュースもありました。山元いちご農園(株)(宮城県山元町)では圃場が2倍に、いちご狩

りの来場者が24倍に。震災を機に自社ブランドの直販に大きくシフトした水産加工品の小野食品(株)(岩手県釜石市)は、会員が4倍以上の4万人を越えたといいます。岩手県陸前高田市の竹駒保育園では、保育園竣工前日の卒園式で撮影した子どもたちが中学3年生となり、ビデオメッセージを送ってくださいました。

ヤマト運輸の石巻蛇田センターでは、津波で帰ってこられなかった阿部 正ドライバーの息子さんが、お父様の背中を追って、セールスドライバーとして活躍されているのを取材させていただきました。

東日本大震災から10年が経ち、当時を知らない若い世代も増えていきます。あれから日本各地でさまざまな自然災害も発生し、また今日は新型コロナウイルスという未知の敵との戦いも続いています。

しかし、あの震災で得た数々の教訓が我々にはあります。どれだけの歳月が経とうとも、決して風化させてはならない大切なものがあることを、本誌を手に取ることで、改めて心にとどめていただければと願っています。

2021年11月19日

「東日本大震災10年目の報告」製作委員会

地震の概要

地震名 : 2011年東北地方太平洋沖地震
発生日時 : 2011年3月11日(金)午後2時46分
震源地 : 三陸沖 約130km付近 深さ24km
地震規模 : マグニチュード9.0
最大震度 : 7(宮城県栗原市)

被災状況(全国)※

人的被害 : 死者19,747名 行方不明者2,556名 負傷者6,242名
建物の被害 : 全壊122,005棟 半壊283,156棟 一部破損749,732棟
火災の発生状況 : 330件

東日本大震災10年目の報告

発行日 2022年3月11日

発行 公益財団法人ヤマト福祉財団
〒104-8125 東京都中央区銀座2-16-10
電話 03-3248-0691

発行人 山内雅喜

企画・編集 「東日本大震災10年目の報告」製作委員会

制作・印刷 株式会社プランニングハウスHARA

本書の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。



公益財団法人ヤマト福祉財団